

小松市内遺跡発掘調査報告書 IX

八幡遺跡
吉竹遺跡

2013.3

石川県小松市教育委員会

例言

1. 本書は、石川県小松市内において小松市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 試掘調査・発掘調査・出土品整理・報告書刊行は、文化庁補助金を受けて実施した。
3. 対象となった埋蔵文化財、並びに調査地・調査原因・調査面積・調査期間・調査担当者は次のとおりである。

【八幡遺跡】(平成20年度)

- [調査地] 石川県小松市八幡
[調査原因] 工場用地造成
[試掘調査] 2008. 7. 3～2008. 7. 7
[試掘担当] 宮田 明
[調査面積] 467m²
[発掘調査] 2008.10.13～2008.12.24
[調査担当] 川畑謙二、下濱貴子

【吉竹遺跡】(平成22年度)

- [調査地] 石川県小松市吉竹町
[調査原因] 個人住宅建設
[試掘調査] 2010. 8.20
[試掘担当] 津田隆志
[調査面積] 353m²
[調査期間] 2010. 9. 1～2010.10.15
[調査担当] 宮田 明

4. 発掘調査は、臨時作業員を雇用して実施した。
5. 出土品整理並びに実測・製図は、臨時作業員を雇用して、平成24年度に実施した。
6. 遺構の実測及び写真撮影は、各発掘調査担当者が行い、遺物の写真撮影は、各執筆担当者が行った。
7. 本書の執筆は各担当者を目次に付記し、編集は宮田が担当した。
8. 発掘調査に係る遺物・図面・写真等の資料は、すべて小松市教育委員会で一括保管している。

凡例

1. 本書に示す座標は平面直角座標 VII 系、高度は標高 (T.P.) で表示し、世界測地系 (測地成果 2000) に準拠している。
2. 本書に示す方位は、特に断りがない限り、座標北である。
3. 本書に示す土色は、マンセル表色系に準拠している。
4. 本文中で「飛鳥時代」は古代の範疇で扱っているが、報告書抄録では、時代名称は原則として「石川県遺跡地図」の区分に準拠し、「古墳時代」としている。

目次

I 位置と環境	……………(宮田)…………	1
II 八幡遺跡発掘調査	……………(川畑)…………	15
III 吉竹遺跡発掘調査	……………(宮田)…………	47

写真図版 1～12
報告書抄録

第1章 位置と環境

第1節 地理的環境

1 市勢と沿革

小松市は石川県南部に位置し、東西約20km、南北約30kmに跨る市域は面積371.13km²を測る。南は大日山(1368m)で福井県勝山市と境し、ここより約5km北に位置する鈴ヶ岳(1174m)を水源とする梯川流域を包括した市域をなしている。市域の大半は山岳地であり、約11万人を数える人口の大部分は北西部の狭長な平野部に集中している。近世城下町として成立し、商業都市として発展した小松町を核として近隣7町村を合併して昭和15年市制施行、その後2次にわたる編入合併を経て現在に至っている。

2 加賀三湖と月津台地

小松市の山岳地(加越山地)は新第三紀火砕流堆積物よりなるが、この外縁を縁取るように、第四紀高位段丘がなだらかな丘陵を形成している。ここより北にせり出すのが月津台地で、標高は、高所で約20m程度あるが、平均的には5~10m程度で、なだらかな起伏の連続した中位段丘である。大きな開析谷で区切って、北を御幸野台地、南を矢田野台地と呼ぶこともある。かつて、周囲は浜堤列で海と隔てられた潟湖が囲み、泥質の湿地や湿田が広がっていたが、現在は今江潟の全域、柴山潟の約3分の2が干拓され、湿田や湿地も月津台地の採取土で埋め立てて乾田化されている。

梯川は、大杉谷を北流し、郷谷川・滓上川等を合わせて国府台地をめぐりながら西に向きを変え、八丁川・前川等を合わせて、安宅で浜堤を突き破って日本海に注ぐ。図2は明治時代の河道と水域を合成したもののだが、幕末の頃までは、細かく複雑に蛇行していた。

3 梯川と梯川デルタ

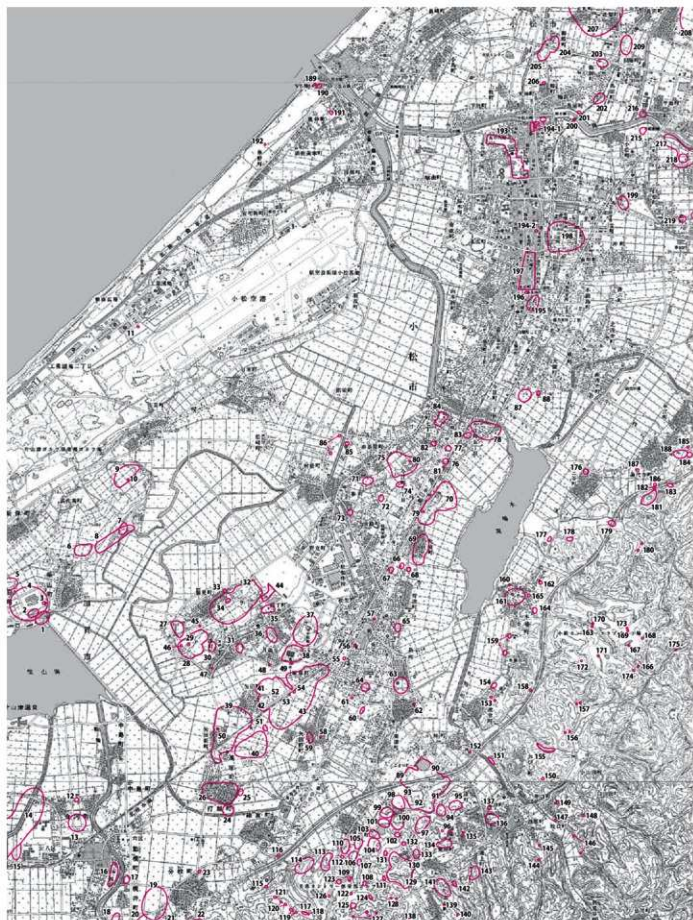
梯川は掃流力が弱く、自然堤防の発達が悪い平坦な沖積平野を形成した。河道が南に折れる地点が小松城跡で、小松町は埋没したもっとも内陸側の浜堤列上に立地している。梯川デルタはこれより下流には形成されず、河道は手取川デルタとの境界に当たる最も低い位置にある。複雑に蛇行する河道はしばしば氾濫したため、明治維新直後から河道の直線化工事が繰り返さ



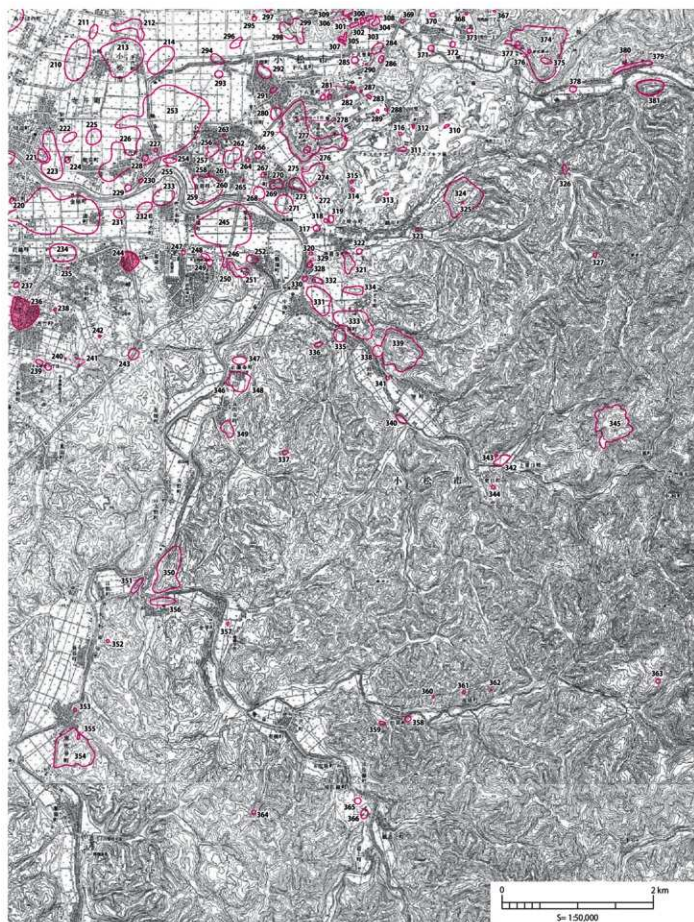
第1図 小松市の位置



第2図 小松市の地形



第3図 遺跡分布図



れてきた。明治44年～大正12年に石田橋～安宅間の開削工事により、現在の河道になり、河川改修は現在も続いている。

本報告で言う梯川デルタとは、事実上、梯川と今江湯・木場湯を結んだ領域を指している。図2に表示はないが、この領域には明治20年頃までは扇形に小河道群が残っており、灌漑に利用されていた。この中央を貫流していた猫橋川が本流とされ、これら小河道群は、デルタを形成した梯川旧河道群と見なされる。傾斜の少ない平坦な地形はしばしば洪水被害を引き起こし、明治32年の耕地整理法以降、用水確保と洪水防除の必要から用排水路の整備が繰り返行われた。

第2節 歴史的環境

1 旧石器～縄文時代の遺跡

発見例自体は決して少なくないが、小松市内では資料が乏しい。能美丘陵界隈で言えば、河田山遺跡(276)や八里向山A～F遺跡(300～305)など、散発的に遺物や遺構が確認された例はあるが、集落遺跡としての確認例は断片的である。能美市能美丘陵東遺跡群では、宮竹庄が屋敷A～D遺跡や宮竹うっしよま A・B遺跡(いずれも図郭外)など、縄文時代中期を中心に豊富な資料を得るに至っている。遺跡のほぼ全域を調査したこの両者は非常に好対称をなしている。

一方、月津台地では、念仏林遺跡(37)が集落遺跡としては代表的な調査例と言えるだろう。近現代の開発も含め、多くが後世の破壊を受けて潰滅的な状態の中で、集落像の一事例を提供している。能美丘陵でも月津台地でも、縄文時代の集落遺跡の多くは短期間に営まれた小集落で、南加賀では能美丘陵が分布的中心をなすと見なされる。

2 弥生時代の遺跡

八日市地方遺跡(198)が大規模な環濠集落として特筆され、中期はここだけに収斂する趨勢であり、後期頃から古墳時代前期にかけて梯川周辺に広い範囲に集落が点在する景観となる。代表的なところでは、高堂遺跡(図郭外)、大長野A遺跡(210)、漆町遺跡(220)、荒木田遺跡(245)のように、広大な領域の複合遺跡で法仏期頃以降の遺物が出土していて、月影期頃にかけては、河田山遺跡(276)や八里向山A遺跡(300)で高地性集落が確認されている。ただ注意が必要なのは、広大な領域の複合遺跡というのは、現集落からはずれた範囲であることが前提であり、範囲の狭小な遺跡は、現集落と重複して確認できないことが多い。

3 古墳

能美地域の首長墓の系譜とされる末寺山5・6号墳、秋常山1号墳、和田山5号墳(いずれも図郭外)を擁する能美古墳群が手取川河道域と目される領域の南に接して築造される。造墓は弥生時代末に始まり、古墳時代を通じて造墓が継続する、能美地域の中核的古墳群と評価されている。

能美丘陵界隈では、中期後半以降、河田山古墳群(277)や下開発茶白山古墳群(図郭外)など、中小規模の円墳・方墳が尾根筋に密集して混在しないいずれかのみで構成される群集墳が各所に分布する。また、平野部では、千代オオキダ遺跡(226)で、削平された方墳からなる前期段階の古墳群が発見され、新たな知見を得るに至っている。

月津台地では、小規模な後期古墳が疎らに分布する趨勢で「三湖台古墳群」と総称され、古墳群としては江沼地域に属する。造墓が始まる早い段階では白のほぞ古墳(44)や御幸塚古墳(82)などの中規模の前方後円墳が見られるが、主体は小規模な円墳で、埴輪を伴う。矢田借屋古墳群(52)のような密集する造墓のあり方は、三湖台古墳群では今のところ特異な事例といえるだろう。

埋葬施設は、木棺直葬から後期前半に木芯粘土室、さらに後半に切石横積六式石室が採用される。

4 古墳時代～古代・中世の遺跡

集落遺跡の趨勢で言えば、6世紀以降8世紀にかけては集落の再編期に当たり、相対的に資料が稀薄になる傾向があり、7世紀頃を前後して廃絶する集落と出現する集落がある。

7世紀代の月津台地では、額見町遺跡(32)の発掘調査以降、矢田野遺跡(43)、薬師遺跡(70)でL字形カマドを設けた竪穴建物跡の発見が相次ぎ、渡来系移民の動静が、木場潟を挟む対岸の江沼丘陵を占地する古代製鉄遺跡群の趨勢との相関性において注目される。

梯川デルタ地域に目を転じると、8世紀、在郷の財氏関連遺跡とされる佐々木遺跡(231)が異彩を放つほかは、概ね盛期が9世紀後半～10世紀前半になる傾向が知られている。墨書土器をはじめとして、施釉陶器や風字硯など、上級に格付けされる遺物が出土するものの、大型建物や倉庫群といった目立つ遺構の発見例に恵まれず、集落遺跡の評価を難しくしている。

寺院跡として、図3には中宮八院(319、322、331、338、347、348、349、352)を表示しているが、現状は伝承地の域を出ない。発掘調査された寺院跡として、浄水寺跡(243)、八里向山B遺跡(301)、里川E遺跡(314)が、いずれも加賀立国以後、中宮八院以前に成立した山林寺院に位置づけられ、浄水寺のほかは短期間で廃絶している。また、目下調査中の松谷寺跡(349)では、8世紀前半に遡る古代山林寺院跡が確認され、「松谷廃寺」として名称上の区別を明確にして取り扱うこととなった。なお、同調査で「松谷寺」は確認に至っていない。

製陶遺跡群について、6世紀前半には二ツ梨東山古窯跡(105)で須恵器生産を開始し、二ツ梨豆岡向山古窯跡群(100)、二ツ梨様池古窯跡群(101)で埴輪を焼成した窯も確認されており、江沼地域の古墳出土埴輪の供給地と考えられている。以後、10世紀中頃まで操業が続く南加賀古窯跡群が江沼丘陵を占地する。一方の能美丘陵では、7世紀前半に八里向山J遺跡(地蔵谷古窯跡:309)で須恵器生産を開始し、同後半代には湯屋古窯跡群(図郭外)に操業の拠点を移動する。8世紀前半には和気古窯跡群(図郭外)へさらに移動し、9世紀前半まで窯を移動しながら操業が続き、疎らな窯跡群を残した。これら能美市和気地区の窯跡群は、能美古窯跡群の南群として括られ、窯1基あたりの出土量が多い特徴が知られている。南加賀古窯跡群との比較では、操業の盛衰が補完的な傾向が指摘される一方で、技術的にも供給的にも両者の異質性も指摘されている。

これら製陶遺跡群とほぼ重複して、製鉄遺跡群も分布する。遺跡の性質上、時代不詳の遺跡は多いが、現在までに知られる最古の例として、蓮代寺ガッシュウタン遺跡(183)で製鉄に伴うと見られる製炭窯が7世紀後半～未だし8世紀初頭に比定されている。

律令期～中世には、各所で荘園が開発されるが、発掘調査でこれに関連する成果として、徳久・荒屋遺跡、下開発遺跡(いずれも図郭外)が律令期に成立した東大寺領幡生荘に比定されている。また、白江梯川遺跡(218)、漆町遺跡(220)は中世に皇室領や京都妙法院領として経営された南白江荘に関連する遺跡とされ、前者は在地領主層の拠点と考えられている。白江堡跡(218)は、『能美郡誌』によれば、従前の白江念仏寺塔遺跡(漆町遺跡:220)周辺が推定地の一つに上がっていたが、『石川県遺跡地図』に記載される内容と、従来プロットされていた旧白江墓地で埋蔵文化財が存在しなかった事実を勘案すれば、現在までの情報に照らす限りは、ここに比定すべきだろう。

5 中世の城館・寺院・窯跡

中世城館跡や中世寺院跡は、文献や口碑によるところが大きく、その多くは一向一揆にまつわるものである。近代の耕地整理で破壊を受けた遺跡が多く、調査が入った事例は極めて乏しい。岩瀧城跡(339)、岩倉城跡(345)、波佐谷城跡(354)など、縄張り図が作成されている事例はあるが、いずれも、城郭としての構造が判然としない。

中世窯業について、古代の南加賀古窯跡群の分布域にほぼ重複して、在地瓷器系窯、いわゆる「加賀窯」が分布する。常滑窯の技術に基づく窯で、甕を中心とした日用雑器類の生産が主力であったとされる。操業の期間が短く、12世紀末までには二ツ梨奥谷1号窯(108)で操業を開始し、湯上谷古窯跡群(143)で盛期を迎えるが、これを最後に14世紀代に一旦途絶え、西荒谷カマンダニ窯(図郭外)で越前窯の技術移植により一時操業するが、現在までに流通は確認されておらず、程なく終焉したといわれている。

6 近世～現代

1640(寛永17)年、藩主を退いた前田利常の小松城入城を契機として、城下町としての小松町が成立するが、関連するところで大川遺跡・東町遺跡(194)が埋蔵文化財包蔵地(近世の町屋跡)として周知化されている。大川遺跡では発掘調査も実施され、小松市でも近世城下町に考古学のメスが入りつつある。なお、前田利常の没後、亡骸は三宅野(現在の小松市河田町地内)で茶昆に付されたとされており、灰塚(264)が伝わっている。

近代窯業の関連で、19世紀初めに加賀藩窯としての若杉窯(235)に始まるいわゆる再興九谷は、肥前系の染付・色絵の技術を移植して操業が軌道に乗り、若杉窯で技術を習得した陶工らによって、蓮代寺窯(186)、小野窯(263)などの民窯も操業を始めた。近代以降も民営の製陶業は引き継がれている。窯業という括り而言えば、再興九谷とほぼ時期を同じくして越前より技術移植して操業が始まる製瓦業も現代に引き継がれ、製品は「小松瓦」と呼ばれる。

さて、現集落の多くは近世以降に興った集落であり、地名も、郷名または荘園、中宮八院に所以を持つものなど見られるが、集落自体に直接の関係はなく、地名伝承にも不確かな部分が多い。史実で確かめられる伝承でも、例えば、一向一揆の古戦場伝承が古墳と結びついたり(土百古墳:81)、戦国末期の武将の墓と伝承される塚が古墳であったり(左門殿古墳:45)するなど、類似の事例はいくつか明らかになっている。加賀国府・国分寺や中宮八院などの文献史の分野で研究が進んでいる場合でも、伝承地が曖昧であったり複数あるなど、所在が確認できない現状を抱えている。

第1表 遺跡地名表

No	名 称	種 別	時 代	備 考
1	礪山水底貝塚	貝塚	縄文	
2	礪山中世墓	その他の墓	中世	
3	礪山神社遺跡	散布地	不詳	
4	礪山城跡	城跡跡	中世	
5	一白A遺跡	散布地	古墳～古代	
6	礪山貝塚	貝塚・集落跡	縄文	加賀市歴史史跡
		集落跡	古代	
7	礪山水底遺跡	貝塚	弥生	礪山山村遺跡A地点に所在する貝塚
8	礪山山村遺跡(A地点)	集落跡	弥生	
	礪山山村遺跡(B地点)	集落跡	古代～中世	礪山貝塚に隣接する地点
9	山の土遺跡	散布地	縄文	
10	佐美緑塚	緑塚	不詳	
11	日本緑塚	緑塚	不詳	
12	合同遺跡	散布地	不詳	
13	新橋遺跡	散布地	古代(平安)	
	旧橋遺跡	散布地	縄文	
		集落跡	弥生～中世	
15	部もどり地蔵遺跡	散布地	古代	
16	動物塚跡	塚跡跡	中世(室町)	
17	祝井衛生センター遺跡	散布地	古代	
18	祝井遺跡	散布地	古代	
19	分枝A遺跡	散布地	古墳	
20	分枝B遺跡	散布地	古代(平安)	
21	分枝山王古墳群	古墳	古墳	円墳2
22	分枝カナン古墳群	古墳	古墳	前方後円墳3、円墳10、方墳6

No	名 称	種 別	時 代	備 考
23	分枝高山古墳	古墳	古墳	前方後円墳
24	行越A遺跡	散布地	縄文	
25	行越B遺跡	散布地	弥生	
26	行越城跡	城跡跡	中世(安土桃山)	
27	額見町西遺跡	集落跡	弥生～中世	
28	茶臼山A遺跡	散布地	不詳	
	茶臼山B遺跡	散布地	縄文	
29	茶臼山(原)遺跡	その他(原祀)	古代(奈良)	
30	月津オカ遺跡	散布地	古墳・中世	
31	月津A遺跡	散布地	古代(奈良)	
32	額見町遺跡	集落跡	縄文	
33	額見神社前A遺跡	散布地	古墳～中世	
34	額見神社前B遺跡	散布地	縄文	額見町遺跡の一部
35	串町遺跡	散布地	縄文・不詳	
36	月津新遺跡	散布地	縄文・古代	
37	念仏林遺跡	集落跡	縄文	
38	念仏林南遺跡	集落跡	弥生～古墳	
39	矢田新遺跡	集落跡	古代(奈良)	
40	刀何理遺跡	散布地	縄文	
41	矢田A遺跡	集落跡	古代～中世	
42	矢田B遺跡	散布地	縄文	矢田野遺跡の一部
43	矢田野遺跡	集落跡	古墳～古代	
44	白のはら古墳	古墳	古墳	前方後円墳
45	左門殿古墳	古墳	古墳	円墳
46	茶臼山古墳	古墳	古墳	円墳、2段築成
47	観音寺古墳	古墳	古墳	円墳
48	念仏塚古墳	古墳	古墳	円墳
49	念仏林古墳	古墳	古墳	円墳、木芯粘土室
50	丸山古墳	古墳	古墳	円墳、切石櫛椀式石室、家形石棺
51	狐森塚古墳	古墳	古墳	円墳又は前方後円墳
52	矢田明塚古墳群	古墳	古墳	円墳14、前方後円墳3、不明1、木芯粘土室
53	百人塚古墳	古墳	古墳	円墳
54	矢田野古墳群	古墳	古墳	円墳3、前方後円墳1
55	矢田野エゾリ古墳	古墳	古墳	前方後円墳
56	輿輪塚古墳	古墳	古墳	前方後円墳
57	苜蓿石山古墳	古墳	古墳	円墳、切石櫛椀式石室
58	中村古墳	古墳	古墳	円墳、切石櫛椀式石室
59	矢田野神社前遺跡	散布地	古代(平安)	
60	下栗津A横穴群	横穴墓	不詳	横穴7～8
61	息軒塚	経塚	不詳	
62	下栗津B横穴群	横穴墓	不詳	横穴2
63	馬遺跡	散布地	弥生～古墳・中世	
64	馬B遺跡	散布地	古墳～古代	
65	馬C遺跡	散布地	古墳	
66	苜蓿A遺跡	散布地	縄文	方墳?
67	苜蓿B遺跡	散布地	縄文	
68	苜蓿C遺跡	集落跡	古墳	
69	矢崎宮の下遺跡	集落跡	縄文～中世	
70	栗跡遺跡	集落跡	古墳～古代	
71	車カンノヤマA遺跡	散布地	古代(奈良)	
72	車カンノヤマB遺跡	散布地	古墳	
73	車カンノヤマC遺跡	散布地	古墳	
74	今江山ノ山遺跡	散布地	弥生	
75	狐山遺跡	集落跡	古墳	
76	土白遺跡	散布地	縄文	
77	今江五丁目遺跡	集落跡	縄文・古墳	
78	五郎地日塚	日塚	縄文	
79	矢崎B古墳	古墳	古墳	
80	狐山古墳	古墳	古墳	
81	土白古墳	古墳	古墳	
82	御平塚古墳	古墳	古墳	前方後円墳、小形市指定史跡
83	今江横穴群	横穴墓	不詳	横穴4
84	御平塚城跡	城跡跡	中世	土器と曲輪の一部

No	名 称	種 別	時 代	備 考
85	申古窯跡	生産遺跡	中世末	製陶
86	日本瓦窯跡	生産遺跡	近世前期	焼瓦窯
87	大加遺跡	散布地	古代	
88	浅井昭古戦場	その他の墓	中世末	照指定史跡
89	林起善寺跡	社寺跡	不詳	
90	林遺跡(林タカヤマ古窯跡群)	生産遺跡	古墳	須恵窯系3、南加賀古窯跡北群
	林遺跡(林オオカミダニ古窯跡群)	生産遺跡	古墳	須恵窯系2、土師器坑1、南加賀古窯跡北群
	林遺跡(林製鉄跡)	生産遺跡	古代	製鉄炉2、加賀窯4、鍛冶炉2、焼型坑2
91	伊津5・12号窯跡	生産遺跡	古代(平安)	須恵窯系2、南加賀古窯跡北群
	伊津シンプザワ製鉄跡	生産遺跡	古代(平安)	製鉄炉4、製炭窯3
92	伊津古窯跡群	生産遺跡	古代・中世(鎌倉)	須恵窯系36(瓦陶窯系5)、土師器坑19、製炭窯2、加賀窯1、南加賀古窯跡北群
93	伊津六字ヶ丘古窯跡群	生産遺跡	古墳	須恵窯系7、製炭窯1、南加賀古窯跡北群
94	伊津1号窯跡	生産遺跡	古代(平安)	製炭窯
	伊津ワクダニ遺跡	生産遺跡	不詳	製鉄炉1、製炭窯1
95	伊津ショウガタニ遺跡	生産遺跡	古代(平安)	須恵窯系1、製鉄炉1、南加賀古窯跡北群
96	伊津2号窯跡	生産遺跡	不詳	製炭窯
97	伊津アナヤマ古窯跡	生産遺跡	不詳	製炭窯
97	伊津オオタニ遺跡	生産遺跡	古代(奈良)	須恵窯系2、製鉄炉1、南加賀古窯跡北群
98	二ツ梨一貫山古窯跡群	生産遺跡	古代	須恵窯系12、土師器坑28、製鉄炉1、製炭窯2、南加賀古窯跡北群
99	二ツ梨豆岡山古窯跡群	生産遺跡	古墳・古代	須恵窯系4
100	二ツ梨岡山向山古窯跡群	生産遺跡	古墳～古代	須恵窯系12(焼陶窯系2)、瓦陶窯系2)、南加賀古窯跡北群
101	二ツ梨船越池古窯跡群	生産遺跡	古墳・古代(平安)	須恵窯系(焼陶窯系)3、土師器坑3、南加賀古窯跡北群
102	二ツ梨ミノキバラ古窯跡群	生産遺跡	古代	土師器坑4、須恵窯系、南加賀古窯跡北群
103	二ツ梨丸山古窯跡群	生産遺跡	古墳	須恵窯系3、南加賀古窯跡北群
104	二ツ梨野山古窯跡群	生産遺跡	古墳	須恵窯系8、南加賀古窯跡北群
105	二ツ梨東山古窯跡群	生産遺跡	古墳	須恵窯系5、南加賀古窯跡北群
106	二ツ梨船越池遺跡	生産遺跡	古代(奈良)	須恵窯系1、製鉄1、製炭窯1、南加賀古窯跡北群
107	二ツ梨横川遺跡	生産遺跡	古代(奈良)	須恵窯系1、製鉄1、南加賀古窯跡北群
108	二ツ梨奥谷古窯跡群	生産遺跡	古代(平安末)	須恵窯系2、加賀窯1、南加賀古窯跡北群
109	二ツ梨奥谷1～2号製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄2
110	二ツ梨釜谷古窯跡群	生産遺跡	古代	須恵窯系6(瓦陶窯系)1、南加賀古窯跡北群
111	二ツ梨カセイダ古窯跡群	生産遺跡	不詳	須恵窯系2、南加賀古窯跡北群
112	矢田野山古窯跡群	生産遺跡	古代(奈良)	須恵窯系6、南加賀古窯跡北群
113	矢田野長尾山遺跡	生産遺跡	古代(奈良)・中世(鎌倉)	須恵窯系4、加賀窯2、製鉄3、南加賀古窯跡北群
114	箱宮ドウガヤチ古窯跡群	生産遺跡	古代(奈良)・中世(鎌倉)	須恵窯系6、加賀窯2、南加賀古窯跡北群
115	箱宮A遺跡	散布地	中世	
116	箱宮B遺跡	散布地	中世	
117	小大玉谷1～2号窯跡	生産遺跡	中世(鎌倉)	加賀窯2
118	小大玉谷1号製鉄跡(天王山1号製鉄跡)	生産遺跡	不詳	製鉄炉
119	小大玉谷2～3号製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄2
120	大久保谷1～2号製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄2
121	大久保谷古窯跡	生産遺跡	不詳	
122	那谷1号窯跡	生産遺跡	中世(鎌倉)	加賀窯
123	矢田野カクソツダニ製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄3
124	矢田野1～2号横穴	横穴墓	不詳	
125	那谷1～5号横穴	横穴墓	不詳	
126	那谷6号横穴	横穴墓	不詳	
127	那谷中山谷製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄炉3
128	上高屋ユルイデン製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄炉2
129	上高屋ジャモンダニ遺跡	生産遺跡	古代(平安)	須恵窯系4、製鉄3、南加賀古窯跡北群
130	上高屋サンマイダニ遺跡	生産遺跡	古代(平安)	須恵窯系4～5、製鉄2、横穴1、地下式坑1、南加賀古窯跡北群
131	上高屋サンマイダニキヤマ古窯跡群	生産遺跡	古墳・古代(奈良)	須恵窯系4、南加賀古窯跡北群
132	上高屋キダシ古窯跡群	生産遺跡	古代(奈良)	須恵窯系2、南加賀古窯跡北群
133	上高屋トリダニ古窯跡群	生産遺跡	古代(奈良)・中世(鎌倉)	須恵窯系1、加賀窯1、製鉄炉1、南加賀古窯跡北群
134	上高屋オジヤマ古窯跡群	生産遺跡	中世(鎌倉)	加賀窯4、製鉄炉1
135	伊津1～2号製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄炉2
136	伊津本蓮寺跡	社寺跡	中世(室町)	
137	伊津八幡社前遺跡	散布地	古代～中世	
138	上高屋那谷川遺跡	生産遺跡	不詳	製鉄炉1
139	馬場ニカヤマ遺跡	生産遺跡	古代(平安)	須恵窯系1、製鉄炉1、南加賀古窯跡北群
140	馬場タニヤマ遺跡	生産遺跡	不詳	製鉄炉1

No	名 称	種 別	時 代	備 考
141	上尾原ホウジョウヤマ道跡	生産道跡、社寺跡、墳墓	古代(平安)～中世	須原遺跡5、製鉄炉2、墳墓、南加賀古窯跡北群
142	上尾原ハカランダニ古窯跡群	生産道跡	中世(鎌倉)	加賀窯2
143	同上古窯跡群	生産道跡	中世(鎌倉)	加賀窯10、製鉄炉2
144	西原フルヤシキ製鉄跡	生産道跡	不詳	製鉄
145	西原ムカイヤマカクナソ製鉄跡	生産道跡	不詳	製鉄2
146	牧口キトラ製鉄跡	生産道跡	不詳	製鉄2
147	牧口中伊集跡	墳墓	中世(鎌倉)	牧部塚比定地
148	山田山ドヤマ製鉄跡	生産道跡	不詳	製鉄炉複数
149	川口神社製鉄跡	生産道跡	不詳	製鉄
150	川口エンドウ製鉄跡	生産道跡	不詳	製鉄
151	川口遺跡	散布地	不詳	
152	林六幡神社跡	経塚	中世(鎌倉)	
153	津波倉ホツジ道跡	横穴墓	中世(室町末)	地下式坑6、2基調査
154	大谷山貝塚	貝塚	縄文	
155	小山田コガタニ道跡	散布地	不詳	氣沖散布地
156	小山田ストギ子製鉄跡	生産道跡	不詳	製鉄炉2
157	小山田オケサダニ製鉄跡	生産道跡	不詳	製鉄炉2
158	津波倉ハケマイダニ製鉄跡	生産道跡	不詳	製鉄炉1、製炭窯複数
159	水場古墳群	古墳	古墳	円墳4
160	水場古墳	古墳	古墳	地元で油田跡跡とされる
161	油田城跡	城跡跡	不詳	
162	水場温泉道跡	散布地	縄文	
163	水場A道跡(水場道跡H地区)	生産道跡	古代(奈良)	製鉄炉1、製炭窯2
164	水場B道跡	散布地	古代(平安)～中世	
165	水場C道跡	散布地	弥生	
166	水場道跡A地区(1号道跡)	生産道跡	古代(平安)	製炭窯3、氣沖散布地
167	水場道跡B地区(2号道跡)	生産道跡	古代(平安)	製鉄炉2、製炭窯2
168	水場道跡C地区(3号道跡)	生産道跡	不詳	製鉄
169	水場道跡D地区(4号道跡)	生産道跡	不詳	製鉄炉1、製炭窯1
170	水場道跡E地区(5号道跡)	生産道跡	不詳	製鉄
171	水場道跡F地区(6号道跡)	生産道跡	不詳	製鉄
172	水場道跡G地区(7号道跡)	生産道跡	不詳	製鉄炉1
173	水場道跡D地区(8号道跡)	横穴墓	不詳	横穴1
174	大倉道跡	散布地	不詳	氣沖散布地
175	長谷岡油屋の上道跡	散布地	不詳	氣沖散布地
176	三谷道跡	散布地	縄文	
177	三谷B道跡	散布地	弥生～古墳	
178	三谷トガ谷道跡	不詳	不詳	墳丘又は塚
179	三谷大谷道跡	集落跡	古代～中世	
180	三谷大谷製鉄跡	生産道跡	不詳	製鉄炉1、氣沖散布地
181	蓮台寺城跡	城跡跡	不詳	小規模な野跡
182	蓮代キムコヤマ製鉄跡	生産道跡	中世(鎌倉)	製鉄炉1、製炭窯1
183	蓮代キガッシュウタン道跡	生産道跡	古墳	製炭窯3、氣沖散布地
184	蓮代寺A道跡	散布地	不詳	氣沖散布地
185	本汀古窯跡	生産道跡	近世	製陶
186	蓮代寺窯跡	生産道跡	近世末	西興九谷「蓮代寺窯」
187	蓮代寺瓦窯跡	生産道跡	近世前期	横瓦窯
188	蓮台寺跡	社寺跡	中世	渋川氏所祀寺「蓮台寺」比定地
189	安七郎跡	その他	不詳	祭指定史跡
190	安宅住吉神社道跡	散布地	不詳	
191	安宅中伊集跡	その他の墓	中世(室町)	
192	安宅大塚古墳	不詳	不詳	横石塚とも墳丘の跡石とも。現存せず
193	小松城跡	城跡跡	近世	本丸・二ノ丸・三ノ丸の一部。本丸機台は小松市指定史跡
194-1	大川道跡	貯蔵跡	近世	近世小松城下町・東町の貯蔵跡
194-2	東町道跡	貯蔵跡	近世	近世小松城下町・東町の貯蔵跡
195	幸町道跡	生産道跡	中世(室町)	鍛冶
196	多人神社境内道跡	散布地	中世(室町)	埋納瓦出土地
197	本前城跡	城跡跡		本前氏前代跡伝承地の一
198	八日市地方道跡	散布地	縄文・中世	
199	上小松道跡	集落跡	弥生	環壕集落
200	上小松道跡	散布地	古代(平安)	
200	横川鉄炭道跡	散布地	弥生	横川に分散された石炭貯蔵地
201	横川鉄炭B道跡	散布地	弥生	横川に分散された石炭貯蔵地
202	島田A道跡	散布地	古墳～古代	

No	名 称	種 別	時 代	備 考
203	鳥田B遺跡	散布地	古墳	
204	御船遺跡	城跡跡	中世(室町)	
205	真塚遺跡	散布地	弥生~古代	一向一揆・梶川新七郎重親回廊伝承地
		集落跡	中世	
206	梅遺跡	散布地	弥生~古代	
		集落跡	中世	
207	松梨遺跡	散布地	縄文~弥生・中世	
		集落跡	古墳~古代	
208	長田遺跡	散布地	弥生~古墳	
		散布地	弥生・古代(平安)	
209	長田南遺跡	集落跡	中世(室町)	
210	大長野A遺跡	集落跡	弥生~中世	
211	大長野B遺跡	散布地	不詳	
212	牛島宮の島遺跡	集落跡	古代(平安)	
213	千代デジロ遺跡	集落跡	弥生~中世	
214	牛島ウハシ遺跡	集落跡	縄文~中世	
215	平山榑川遺跡	集落跡	弥生	榑川に分断された左岸側包蔵地
216	平山榑川B遺跡	散布地	弥生	榑川に分断された右岸側包蔵地
217	白江榑川遺跡	集落跡	弥生・中世	
218	白江塚跡	城跡跡	中世(室町)	白江新助景福回廊伝承
219	白江遺跡	散布地	古墳~中世	榑川遺跡の一部
220	榑川遺跡	集落跡	弥生~中世	
221	一針遺跡	散布地	縄文	
222	一針B遺跡	集落跡	弥生~古墳	
223	一針C遺跡	集落跡	弥生~古墳	
224	定地坊跡	社寺跡	中世(室町)	
225	千代・能美遺跡	集落跡	古墳~中世	
226	千代オオキダ遺跡	散布地	縄文~弥生	方墳6
		集落跡	弥生~中世	
		古墳	古墳	
227	千代小野町遺跡	散布地	古墳	
228	千代城跡	城跡跡	中世(室町)	
229	千代本村遺跡	散布地	古墳	
230	横地遺跡	散布地	縄文	
231	佐々木遺跡	集落跡	古代	財氏邸宅跡(奈良)
232	佐々木ノアウラ遺跡	集落跡	弥生~中世	
233	佐々木アサハタケ遺跡	集落跡	弥生~中世	
234	打越遺跡	散布地	古代	
235	若杉塚跡	生産遺跡	近世末	再興九谷「若杉窯」、地炉式登窯
236	吉竹遺跡	集落跡	弥生~中世	
237	吉竹B遺跡(吉竹遺跡19地区)	散布地	古墳	旧河道の堰跡
238	吉竹C遺跡	集落跡	弥生~中世	
239	千木野遺跡	散布地	縄文	方墳8
		千木野(A)遺跡	古墳	
		千木野(B)遺跡	古墳	
240	榑川1号墳	古墳	古墳	所在不詳、現在存するのは現代戦士の山
241	釜谷古墳・釜谷2号墳	古墳	古墳	切石積壇六式石室
242	若杉オソボ山1号塚跡	生産遺跡	古墳	浪忠窯窯
243	浄水寺跡	社寺跡	古代~中世	創建は加賀国司・因分寺親道山林寺院跡の一
244	八幡遺跡	散布地	縄文	土坑墓 円墳8、木芯粘土室 再興九谷「八幡若杉窯」、八幡6号墳を削平して築いた 連房式登窯
		集落跡	弥生~古墳・古代(奈良)・ 中世(鎌倉)	
		その他の墓	古代(平安)	
		古墳	古墳	
245	八幡古墳群	古墳	古墳	
246	八幡若杉窯跡	生産遺跡	近世末	
245	元木田遺跡	集落跡	古墳~中世	
246	軒南西芳寺遺跡	集落跡	縄文~中世	
247	大谷口遺跡	散布地	弥生	
248	軒南遺跡	散布地	弥生~中世	
249	龜山遺跡	生産遺跡	古墳	玉作
250	軒南中世墓群	その他の墓	中世(室町)	集石墓9
251	軒南廃寺	社寺跡	古代(平安)	大興寺伝承地
252	西芳寺遺跡	社寺跡	古代(平安)	西芳寺伝承地
253	古府しのまち遺跡	集落跡	弥生~古代	
254	古府遺跡	集落跡	古代(平安)	

No	名 称	種 別	時 代	備 考
255	古府アトド遺跡	散布地	古代(平安)	
256	十九堂山遺跡	社寺跡	古代(平安)	加賀四分寺推定地
257	十九堂山中世墓群	その他の墓	中世(室町)	
258	古府竈穴	不詳	不詳	
259	古府シヤ遺跡	散布地	古代(平安)～中世	
260	南野台遺跡	散布地	縄文	
261	小野遺跡	集落跡	古代(平安)	加賀四分推定地の一箇
262	小野スモノキ遺跡	集落跡	古代(平安)	加賀四分推定地の一箇
263	小野遺跡	牛産遺跡	近世末	再興九谷「小野窯」
264	前田利常公民塚	その他の墓	近世	前田利常公が菩提に付された地とされる
265	福田の虫塚	その他	近世末	青山の菩提供養と願除方法を記した石柱、小松市推定史跡
266	福田ミヤケノ遺跡	散布地	不詳	
267	福田ミヤタン遺跡	散布地	不詳	
268	福田ウラムキ遺跡	散布地	古代～中世	
269	福田フルカワ遺跡	散布地	古墳	
270	宮谷寺観音遺跡	散布地	縄文・中世(室町)	
271	福田遺跡	散布地	古代	
272	福田塚	不詳	不詳	
273	福田熊山古墳群	古墳	古墳	円墳 9、木相直岸、本志粘土室
274	福田山古墳群	古墳	古墳	円墳 12、方墳 4
275	御丹殿所古墳	古墳	古墳	円墳
276	河田山遺跡	散布地	旧石器～縄文	
		集落跡	弥生	高地性集落、河田山 10～12号墳が重複
277	河田山古墳群	その他の墓	古代(奈良)	火葬墓、河田山 1号墳の西側に所在
		古墳	古墳	前方後円墳 2、前方後方墳 2、円墳 22、方墳 34、不明 1、木相直岸、本志粘土室、埴石横穴式石室
278	河田山 1号窯跡	竈穴墓	不詳	地下式竈、河田山 34号墳の南に開口
		牛産遺跡	古代(奈良)	須恵器窯、能美古窯跡南群 八里・河田山支群、河田山 60号墳の北西斜面に所在
279	河田山古窯跡	牛産遺跡	不詳	須恵器窯、能美古窯跡南群 八里・河田山支群
280	河田 B 遺跡	散布地	縄文・古代(奈良)	
281	河田 C 遺跡	散布地	不詳	
282	下八里竈穴群	竈穴墓	不詳	地下式竈 6、竈穴 1、不明 1、3地点で計 8基
283	穴場竈穴群	竈穴墓	不詳	竈穴 2基
284	上八里竈穴群	竈穴墓	中世(室町)	竈穴 11基
285	上八里中世竈跡	その他の墓	中世(室町)	
286	上八里 A 遺跡	散布地	縄文・古代(平安)	
287	上八里 B 遺跡	散布地	古代(奈良)	
288	上八里 C 遺跡	竈穴墓	古墳	竈穴 2基
289	上八里 D 遺跡	散布地	古代(奈良)	
290	上八里 1号窯跡	牛産遺跡	古代(奈良)	須恵器窯、能美古窯跡南群 八里・河田山支群
291	上八里 2号窯跡	牛産遺跡	不詳	地下式窯窯、能美古窯跡南群 八里・河田山支群
292	谷内竈穴	不詳	不詳	
293	河田池遺跡	散布地	縄文・中世	
294	下用地列遺跡	散布地	不詳	
295	佐野 A 遺跡	散布地	弥生	
296	佐野 B 遺跡	散布地	古墳	
297	佐野 C 遺跡	散布地	古代	
298	佐野神社前遺跡	散布地	古代(平安)	
299	河田向山下遺跡	散布地	縄文・古代(平安)	
300	河田向山 A 遺跡	古墳	古墳	円墳 7
301	八里向山 B 遺跡	散布地	縄文	
		集落跡	弥生	高地性集落
302	八里向山 C 遺跡	散布地	旧石器～縄文	
		集落跡	弥生	加賀四分・関分寺開道山林寺院群の一
303	八里向山 D 遺跡	散布地	旧石器～縄文	
		集落跡	弥生～古墳	前方後方墳 1、木相直岸
304	八里向山 E 遺跡	散布地	古墳	方墳 2、木相直岸
		集落跡	古墳	方墳 1

No	名 称	種 別	時 代	備 考
305	八里向山 F 遺跡	散布地	縄文	
306	八里向山 G 遺跡	散布地	古墳	行積 10、木船直布
307	八里向山 H 遺跡	その他の墓・横穴墓	中世 (室町)	集石墓 1、横穴 3
308	八里向山 I 遺跡	散布地	弥生・古代 (平安)	
309	八里向山 J 遺跡	その他の墓	中世 (鎌倉)	集石墓群、96 基調査
310	里川 A 遺跡	生産遺跡	古代 (奈良)	須恵器窯、能古京跡南群 八里・泉白支群
311	里川 B 遺跡	生産遺跡	古墳	須恵器窯、能古京跡南群 八里・泉白支群
312	里川 C 遺跡	生産遺跡	不詳	製灰窯 2、製灰坑約 20
313	里川 D 遺跡	生産遺跡	不詳	製灰窯
314	里川 E 遺跡	散布地	縄文	
315	里川 F 遺跡	社寺跡	古代 (平安)	加賀国府・園分寺岡道山林寺院跡の一
316	里川 G 遺跡	社寺跡	古代 (平安)	加賀国府・園分寺岡道山林寺院跡の一
317	里川 H 遺跡	散布地	不詳	
318	遊泉寺・クボタ A 遺跡	散布地	古代 (平安) ~ 中世	
319	遊泉寺・クボタ B 遺跡	散布地	古代 (平安) ~ 中世	社寺 (興明寺) 又は城館伝承地
320	立明寺古墳跡	生産遺跡	古代 (平安)	須恵器窯 (山内集窯)
321	立明寺古墳	古墳	古墳	古代墳墓の可能性も
322	興明寺跡	社寺跡	古代 (平安)	中宮八院、複数ある伝承地の一
323	宮の奥庭墓群	その他の墓	(平安)	墳墓 4、3 基調査、2 号墓は鎌倉時代に鮮輝に利用された?
324	清原寺跡	社寺跡	古代 (平安)	中宮八院、複数ある伝承地の一
325	常徳寺跡	社寺跡	中世 (室町)	一向一揆・宇田常徳の居宅跡とも
326	藤川塚跡	城跡跡	不詳	一向一揆・宇田常徳の居宅伝承地
327	藤川横穴	不詳	不詳	地下式瓦?
328	弘大寺弘院寺跡	社寺跡	中世	
329	弘大寺とうの池古墳	古墳	古墳	
330	弘生寺跡	社寺跡	中世	
331	フッシュウジヤマ古墳群	古墳	古墳	行積 2、木趾粘土土
332	中海 B 遺跡	集積跡	古墳~中世	
333	(伝) 長寛寺跡	社寺跡	古代 (平安)	中宮八院、地名伝承のみ
334	中海 C 遺跡	散布地	古代 (平安) ~ 中世	
335	中海遺跡・岩瀬遺跡	散布地	縄文	
336	岩瀬土野遺跡	散布地	旧石器	
337	長寛寺中世墓跡	その他の墓	中世	
338	赤穂谷口遺跡	散布地	縄文	
339	松の木古橋が淵	不詳	不詳	存在自体が不明、2 基開口とされる
340	赤穂谷スギノキ古橋穴部	横穴墓	不詳	横穴 9、地下式瓦 4
341	善興寺跡	社寺跡	古代 (平安)	中宮八院
342	岩瀬城跡	城跡跡	中世	
343	仏ヶ原城跡	城跡跡	中世	
344	仏ヶ原前庭敷跡・仏ヶ原前墓	その他の墓	古代 (平安)	小松市指定史跡
345	変口遺跡	散布地	縄文	
346	変口中世墓跡	その他の墓	中世	
347	下変口横穴部	横穴墓	不詳	横穴 3
348	岩倉城跡	城跡跡	中世 (室町)	
349	樺の木山遺跡	散布地	縄文	
350	呂降寺跡	社寺跡	不詳	中宮八院
351	護国寺跡	社寺跡	古代 (平安)	中宮八院
352	松谷寺寺跡	社寺跡	古代 (奈良)	8 世紀前半に遡る古代山林寺院
353	松谷寺跡	社寺跡	不詳	中宮八院
354	平野塚跡	城跡跡	中世 (室町)	一向一揆・平野某城伝承地
355	江指城跡 (山神山跡跡)	城跡跡	中世 (室町)	
356	蓮花寺跡	社寺跡	不詳	中宮八院
357	波佐谷遺跡	散布地	中世 (室町)	
358	波佐谷城跡	城跡跡	中世 (室町)	一向一揆・宇津呂丹波守遺城伝承地
359	(伝) 波佐谷松岡寺跡	社寺跡	中世 (室町)	
360	波佐谷横穴部	横穴墓	不詳	横穴 13、地下式瓦 5
361	六橋遺跡	集積跡	縄文	
362	麻呂尾谷遺跡	散布地	縄文	
363	松岡寺跡	社寺跡	中世 (室町)	
364	火打山横穴部	横穴墓	不詳	横穴 3
365	こたい谷横穴	横穴墓	不詳	横穴 1
366	穴山横穴	横穴墓	不詳	横穴 1
367	池城塚跡	城跡跡	中世 (室町)	

No	名 称	種 別	時 代	備 考
363	曾山横穴	横穴墓	不詳	横穴1
364	布橋遺跡	散布地	縄文	
365	寺ノ原遺跡	散布地	縄文	ほかにも寺院跡の伝承あり
366	観台下城跡	城跡跡	不詳	
367	和氣尾山谷東遺跡	生産遺跡	古代(平安)	土師器焼成所、能美古窯跡南群 尾山谷支群
368	和氣尾山谷2号窯跡	生産遺跡	古代(奈良末～平安)	須恵器窯、能美古窯跡南群 尾山谷支群
369	和氣下和氣古窯跡	生産遺跡	古代(平安)	須恵器窯、能美古窯跡南群
370	和氣近世窯跡	生産遺跡	近世	
371	和氣矢口A遺跡	散布地	縄文	
372	和氣分文屋遺跡	城跡跡	不詳	
373	和氣中和氣古窯跡	生産遺跡	不詳	須恵器窯、能美古窯跡南群 尾山谷支群
374	虚空塚城跡	城跡跡	中世	
375	虚空塚山横穴群	横穴墓	不詳	
376	寺島古窯跡	生産遺跡	不詳	須恵器窯、能美古窯跡南群
377	寺島薬師坂古墳	古墳	古墳	
378	瀬谷社跡	社寺跡	不詳	
379	瀬谷中世墓群	その他の墓	中世	
380	瀬谷横穴	横穴墓	不詳	
381	瀬谷城跡	城跡跡	不詳	

参考文献

イ 石川県教育委員会(1992) 石川県遺跡地図

- 石川県立埋蔵文化財センター(1986) 漆町遺跡Ⅰ, 石川県小松市
 石川県立埋蔵文化財センター(1988) 漆町遺跡Ⅱ, 石川県小松市
 石川県立埋蔵文化財センター(1988) 辰口西部遺跡群Ⅰ, 石川県能美市
 石川県立埋蔵文化財センター(1988) 白江梯川遺跡Ⅰ, 石川県小松市
 石川県立埋蔵文化財センター(1989) 漆町遺跡Ⅲ, 石川県小松市
 石川県立埋蔵文化財センター(1989) 漆町遺跡Ⅳ, 石川県小松市
 石川県立埋蔵文化財センター(1989) 白江梯川遺跡Ⅱ, 石川県小松市
 石川県立埋蔵文化財センター(1989) 蓮代寺地区遺跡Ⅰ, 石川県小松市
 石川県立埋蔵文化財センター(1990) 小松市高堂遺跡
 石川県立埋蔵文化財センター(1993) 能美丘陵東遺跡群Ⅰ, 石川県能美市
 石川県立埋蔵文化財センター(1995) 石川県小松市荒木田遺跡
 石川県立埋蔵文化財センター(1997) 能美丘陵東遺跡群Ⅱ, 石川県能美市
 石川県立埋蔵文化財センター(1998) 能美丘陵東遺跡群Ⅲ, 石川県能美市
 (財) 石川県埋蔵文化財センター(1999) 能美丘陵東遺跡群Ⅳ, 石川県能美市
 (財) 石川県埋蔵文化財センター(1999) 能美丘陵東遺跡群Ⅴ, 石川県能美市
 (財) 石川県埋蔵文化財センター(1999) 辰口町上徳山谷山西谷窯跡, 石川県能美市
 (財) 石川県埋蔵文化財センター(2002) 加賀市柴山貝塚・柴山出村遺跡
 (財) 石川県埋蔵文化財センター(2006) 小松市矢田野遺跡群
 (社) 石川県埋蔵文化財保存協会(1993) 小松市林遺跡
 (社) 石川県埋蔵文化財保存協会(1998) 石川県小松市八幡遺跡Ⅰ
 石川県考古学研究会(1988) 石川県城館跡分布調査報告

ウ 上野 興一(1965) 考古篇, 小松市史 4. 風土・民俗篇, 小松市教育委員会, 石川県

カ 軽海用水誌編纂委員会(1996) 軽海用水誌, 小松東部土地改良区, p.75-77, p.201-221, 石川県

コ 小松市教育委員会(1988) 念仏林遺跡, 石川県

小松市教育委員会(1990) 湯上谷古窯跡, 石川県

小松市教育委員会(1990) ニツ梨東山古窯跡・矢田野向山古窯跡, 石川県

小松市教育委員会(1992) 矢田野エジリ古墳, 石川県

小松市教育委員会(2000) 矢田借屋古墳群, 石川県

- 小松市教育委員会 (2003) 八日市地方遺跡 I, 石川県
- 小松市教育委員会 (2004) 佐々木遺跡, 石川県
- 小松市教育委員会 (2004) 八里向山遺跡群, 石川県
- 小松市教育委員会 (2005) 小松市内遺跡発掘調査報告書 I. ニツ梨豆岡向山遺跡, 石川県
- 小松市教育委員会 (2006) 小松市内遺跡発掘調査報告書 II. 矢田借屋古墳群, 石川県
- 小松市教育委員会 (2006) 千代才オキダ遺跡, 石川県
- 小松市教育委員会 (2006) 小野遺跡, 石川県
- 小松市教育委員会 (2006) 額見町遺跡 I, 石川県
- 小松市教育委員会 (2007) 小松市内遺跡発掘調査報告書 III. 葉師遺跡, 石川県
- 小松市教育委員会 (2007) 額見町遺跡 II, 石川県
- 小松市教育委員会 (2008) 額見町遺跡 III, 石川県
- 小松市教育委員会 (2009) 額見町遺跡 IV, 石川県
- 小松市教育委員会 (2010) 額見町遺跡 V, 石川県
- 小松市教育委員会 (2011) 小松市内遺跡発掘調査報告書 VII. 矢崎宮の下遺跡. 葉師遺跡 V 次, 石川県
- 小松市史編纂委員会 (2001) 新修小松市史 3. 九谷焼と小松瓦, 小松市, 石川県
- 小松市史編纂委員会 (2002) 新修小松市史 4. 国府と荘園, 小松市, 石川県
- 夕 辰口町教育委員会 (1982) 辰口町下開発茶臼山古墳群, 石川県能美市
- 辰口町教育委員会 (1985) 辰口町湯屋古窯跡, 石川県能美市
- 辰口町教育委員会 (2001) 辰口町湯屋古窯跡 III, 石川県能美市
- 辰口町教育委員会 (2004) 下開発茶臼山古墳群 II, 石川県能美市
- 辰口町教育委員会 (2005) 和気後山谷窯跡群, 石川県能美市
- テ 寺井町教育委員会 (1997) 加賀能美古墳群, 石川県能美市
- へ 日置 謙 (1923) 石川県能美郡誌. 能美郡役所, p366-375. p642. p823. p1268-1269. p1342-1343., 石川県
- 日置 謙 (1925) 石川県江沼郡誌. 江沼郡役所, p679., 石川県
- ホ 北陸中世土器研究会 編 (1997) 中・近世の北陸, 桂書房, p193-208.

第二章 八幡遺跡発掘調査

第1節 調査の概要

1 調査に至る経緯等

小松市八幡幸 332 番地の株式会社西川技研（代表取締役西川秀雄）より、工場増設のための用地造成工事に伴い、平成 19 年 10 月 25 日付けで埋蔵文化財の取り扱いについて協議書が提出された。当該地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である八幡遺跡に含まれていたことから、試掘調査が必要な旨を事業者へ回答した。その後、試掘調査は翌平成 20 年 7 月 3 日～7 日に実施された。その結果、一部区域を除き埋蔵文化財が確認されたため、工事実施の際には保護措置が必要である旨を事業者へ伝えた。しかし、当該工事計画が大規模な整地工事を実施するものであったことから、工事による埋蔵文化財の破壊が避けられない状況となった。よって、遺跡の破壊が免れない区域約 1,093㎡を発掘調査対象とする結果となった。ただし、調査区内には、前方後円墳である八幡 6 号墳が含まれており、調査着手時期や工事計画との兼ね合いから、古墳とそれ以外の弥生時代集落遺跡の調査を分割して調査を行う方向で、事業者と調整を行った。その結果、調査区を 2 分割し、A 区（467㎡）を平成 20 年度に、B 区（626㎡）を 1 期工事完成後に実施する計画で事業者と合意した。また、零細なため費用負担が困難と判断される事業者の開発事業に該当すると判断されたことから、石川県教育委員会の同意のもと、国庫補助事業として実施することとなった。

平成 20 年 10 月 1 日付けで、事業者より埋蔵文化財発掘調査の実施について依頼書が提出された。これを受けて平成 20 年 10 月 3 日付けで事業者に対し、埋蔵文化財発掘調査の実施回答を行った。



第4図 八幡遺跡 調査区位置図 (S=1/2,500)

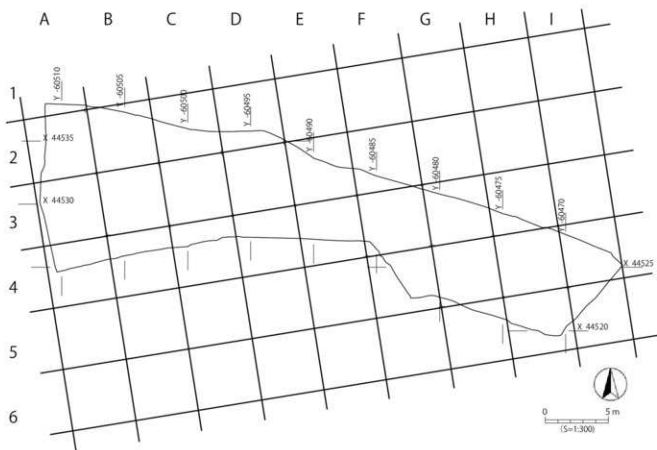
また、平成20年10月1日付けで、事業者より文化財保護法第93条第1項に基づく「土木工事のための発掘届」が石川県教育委員会宛に提出された。これにより平成20年10月3日付けで、石川県教育委員会教育長より、「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）」が事業者に対し通知され、平成20年10月9日付けで事業者と間で埋蔵文化財の取り扱いに関する協定書を締結に至った。発掘調査は、平成20年10月13日から平成20年12月24日にかけて実施した。平成21年1月22日付けで、事業者に対し完了報告を行い、当該地の引渡しを行った。その後、2期工事は当面実施しないこととなり、結果的にB区は現状保存されている。

2 調査の経過

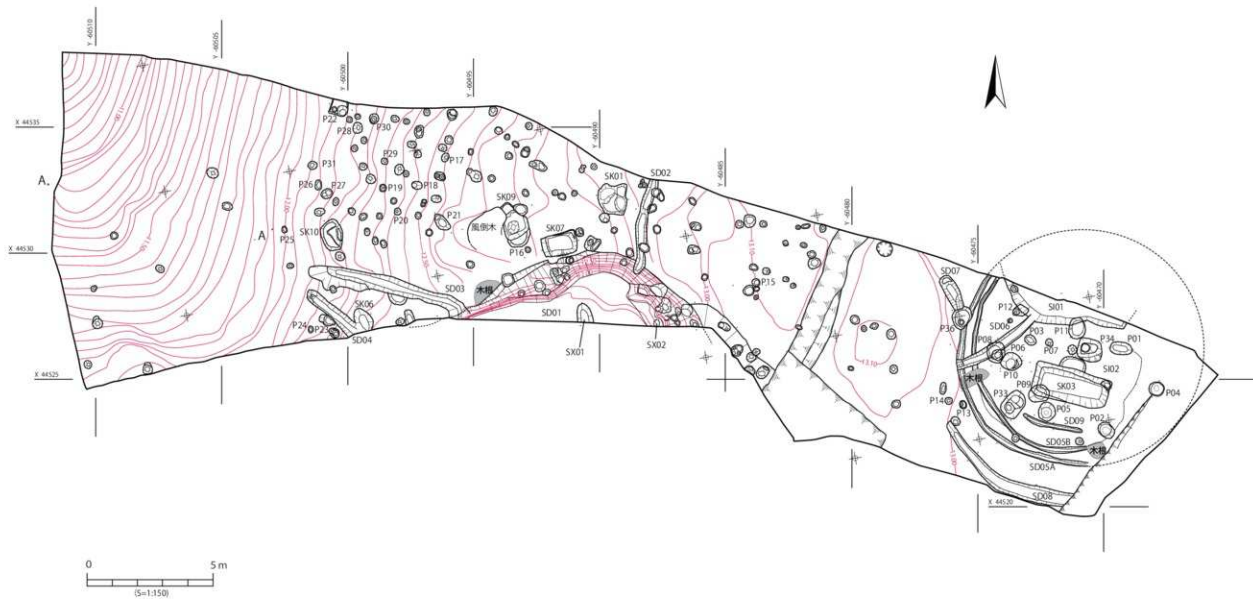
(1) 現地調査の概要

調査に際し、調査区内に5m×5mのメッシュを基本として任意に設定した。基準点及び水準点に関しては、業者委託による4級基準点測量及び4級水準点測量を実施し、調査区近接地に設置した。

調査員立会いのもと、平成20年10月13日に重機で表土除去を行い、その後人力による遺構検出作業を行った。調査区北端は急な崖となっており、崩落防止のため幅約1mは安全帯として掘り残している。遺構検出時に出土した遺物は、グリッドごとに取り上げた。遺構は、任意の箇所に適時土層観察用のアゼを設定し掘り下げた。遺物については、基本的には層位で取り上げる方針としたが、必要なものは随時その位置の記録を行っている。



第5図 八幡遺跡 グリッド配点図 (S=1/300)



第6図 八幡遺跡 平面図 (1/150)

(2) 調査の経過

平成20年10月20日より作業員を導入し、調査を開始した。現地は、竹の地下茎が発達しており、遺構確認作業の障害となった。重機での除去では地山が崩壊してしまうため、残さざるを得なかった。そのため、人力で丁寧に除去する必要があり、予想以上の時間を費やす結果となった。また、前方が試掘時に確認した幅よりも広がったことから、A区内に一部周溝が含まれることとなってしまった。10月27日頃から、弥生時代の建物跡が見えてき始め、11月5日頃より、プラン確認がほぼ終わり、遺構の掘削に入った。遺跡は、東側の弥生集落と、中央部の古墳周溝、西側の谷部と近世八幡窯関連遺構の3つの区域に大きく分かれる見通しとなった。さらに、包含層掘削において、古代の遺物も出土していたことから、さらに古代遺構も重複していることが予想された。11月7日、古墳の周溝を利用した中世墓も造営されていることが判明した。遺構密度が高かったことや、12月より担当者が調査を離れる事情もあったため、下濱調査員が合流し、2名体制として行った。その間に遺構掘削作業を進め、作業はほぼ完了にまで近づいた。12月10日より下濱調査員のみとなり、翌11日より実測図の作成業務に入った。12月24日に全作業を完了することができた。なお、遺構平面図については、トータルステーションにより実測し、国土座標に合わせて作成した。

(3) 出土品整理

出土品整理は、調査年度以降に洗浄・注記作業を出土品整理作業員により行った。報告年度である平成24年度に、分類・接合・実測・トレース等の作業を行っている。

3 既住の調査

八幡遺跡は、今回の調査以前に、平成3年度～平成7年度にかけて社団法人石川県埋蔵文化財保存協会（現財団法人石川県埋蔵文化財センターに統合）によって、発掘調査が行われている。その結果、縄文時代～近世に至るまでの複合遺跡であることが確認された。縄文時代遺構は、中・後期の土坑で、中には落とし穴と考えられるものも存在する。弥生時代後期～古墳時代前期の集落は、多数の建物跡が検出されており、若干の空白期を挟む前半期集落及び後半期集落に整理されている。古墳群は8基確認されており、時期が判明したのは、八幡1号墳（行者塚古墳）と2号墳である。1・2号墳は後期古墳であり、前者はおそらく切石積横穴石室、後者は横穴式木室の埋葬施設を持つ。時期はTK43形式平行（570～600年頃か）であり、1号墳が後出とみられる。7号墳など一部中期末頃とみられるものも存在することから、おそらく造墓の始まりは中期からと考えられる。その他、奈良時代の小規模集落、室町時代の墓地、近世末期の窯跡などが確認されている。特に、近世末期の連房式登窯は、出土資料から再興九谷若杉窯が天保7年（1836）の火出により機能を失い、八幡村に移転した窯と特定されたことから、大きな話題となったものである。ただし、その調査において「文政7年（1824）」銘資料が出土し、これまでの開窯時期を遡る資料として注目されている。八幡6号墳の埴丘南斜面を造成し、構築されており、その場所は「茶碗山」の異名も残っている。施釉陶磁器、素焼品、窯道具類が出土している。また、上絵色見片も出土しており、上絵窯の存在も確認されている。八幡1号墳（行者塚古墳）の西側で、江戸時代後末期の赤瓦窯跡も検出されている。関連遺構として、粘土採掘坑5箇所なども検出されている。八幡村での赤瓦生産の操業は、寛政8年（1796）頃まで遡るとされ、磁器生産が始まる以前に窯業生産の基盤があったことが注目される。

以上、本調査区においても同様に、各時期の遺構が複合して検出されることが想定された。

第2節 発見された遺構

1 各時代の遺構の概要について

遺構確認面の標高は、12.6 m前後であり、梯川左岸の丘陵上に位置している。眼下の平野部には、漆町遺跡群や荒木田遺跡など広大な複合遺跡が広がっている。調査区の西側は、小谷となっており、東側の平坦地に主な遺構が分布する。谷部の堆積をみると、旧表土の段階（近現代か）でほぼ水平に埋まり畑作に利用されていた。その層を除去すると、いわゆる黒ボク層となり、谷底に向い堆積の厚みを増す。黒ボク層直下は、褐色の地山土となっている。その部分では、主として弥生時代後期後半の集落が営まれている。次に古墳（八幡6号墳）が築かれる。周溝が埋まる過程で、西方の奈良時代小規模集落の遺物が混入する。平安時代には、煮炊具の約1/2片が埋められたピットが単独で存在する。近くにある時期不詳の土坑墓とみられる遺構に関連するのかもしれない。県調査区では、10世紀前半とみられる土坑墓らしき遺構も検出されている。その後、3世紀以上の空白期間を挟み、14世紀後半頃に埋まりかけた古墳の周溝を利用した中世墓の造営がみられる。この後再び、近世末期の八幡窯操業まで、人々の生活痕跡は見出せなくなる。

2 弥生時代後期後半～終末期の遺構

(1) 弥生時代遺構の概要

主な遺構は、調査区西端で確認された竪穴建物跡2棟（1棟は建て替えあり）である。既に上面は削られており、床面に近い部分が残存していたのみであった。よって、遺物の出土量も然程多くはない。概ね弥生時代後期後半に該当しており、県調査区における前半期集落の小谷を挟んだ一群と考えられる。確認された2棟の竪穴建物は切り合っており、円形建物から方形建物への推移が確認できる。前半期集落における古相と新相を示す可能性がある。さらに、掘立柱建物へと推移している可能性もあるが、後半期集落に位置付け可能な遺物は出土していない。また、東側小谷手前のC Gr周辺にも遺構の一群があり、6号墳墳丘下にかけて展開すると考えられる。八幡6号墳の周溝内で、当該期土器が多く出土している。特に、最下層からの出土が多いことから、造成時に溝下底に転落したものか、墳丘や周溝肩部の崩落土に含まれていたと考えられる。おそらく弥生集落の生活面は、古墳が造成された段階で削られたと推察される。

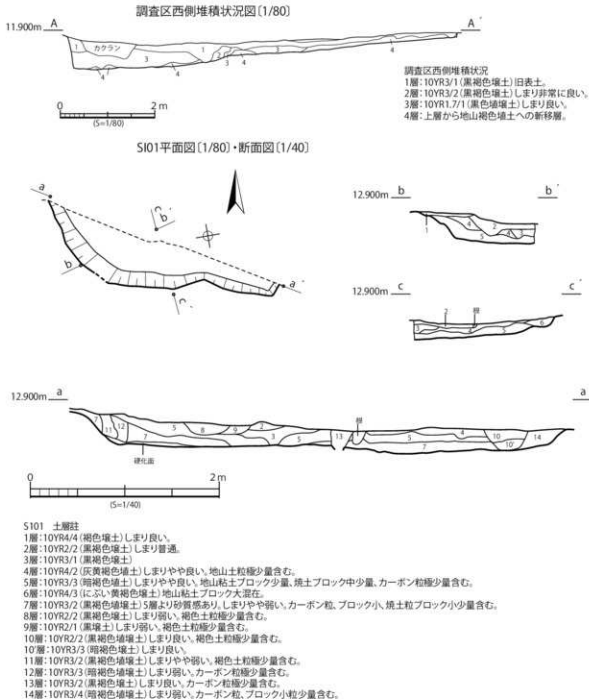
(2) 竪穴建物

① S101

H・I-04・05Grに位置する竪穴建物である。おそらく隅丸形状と考えられるが、大部分は過去の造成行為により削り取られている。確認された最大幅で、約5.2mを測る。暗褐色埴土や黒褐色埴土で埋まり、貼床は確認できず、15cm程度の掘り込みが残存していた。遺物は、埋土中から少量みられるのみで、竪穴建物の時期を示すとはいえない。S102とは有意の差は認められないが、切り合いから新しいことはいえる。S106については、土層断面からS101埋没後に掘削された溝と判断される。竪穴から離れる床床面レベルは上がっており、排水等の関連遺構ではないと考えられる。

② S102

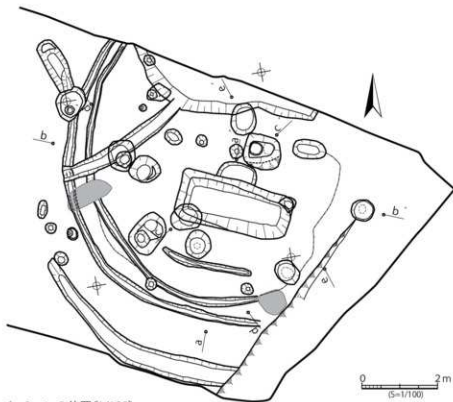
G~I-04~06Grに位置する竪穴建物で、1回の建て替えが確認されている。壁周溝での土層断面から、AからBへの建て替えと推定される。しかし、約2/3にあたる部分は、既に削平され失われている。



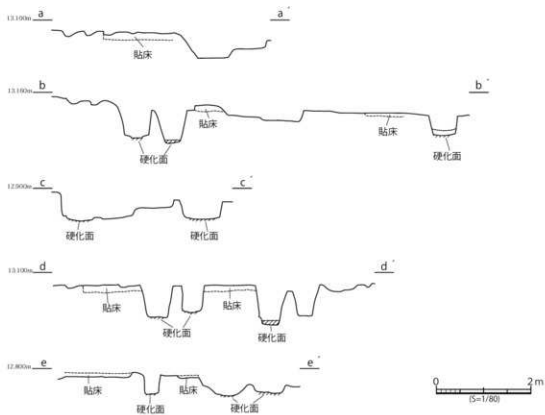
第7図 八幡遺跡 調査区西側土層断面、S101 実測図

〔S102A〕

やや楕円形の平面形とみられ、確認最大幅で8.6mを測る。壁周溝(SD05A)は、幅18~25cm、床面からの深さ7~10cm程度であり、全周していたと推察される。確認された主柱は4本で、全体では7本か8本の多角形配置に復元される。東からP4・P2・P33(旧SKO2)・P8が該当する。柱間寸法は、P4-P2間で2.57m、P2-P33間が3.98mと広く、P33-P8間が2.24mとやや狭く一定しない。柱穴の大きさは、上面が削平されたP4を除き最大径70~80cmを測る。P33は、竪穴内側へ掘り直されており、最大幅110cmを測る。最初の位置では、底面の硬化はあまり顕著ではなく、設置し直し側が長期間荷重を支えていたと考えられる。また、他の柱穴の床面に



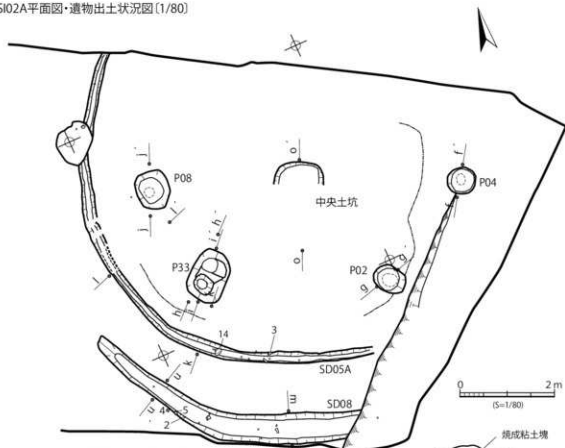
SI02全体エレベーションの位置 [1/100]



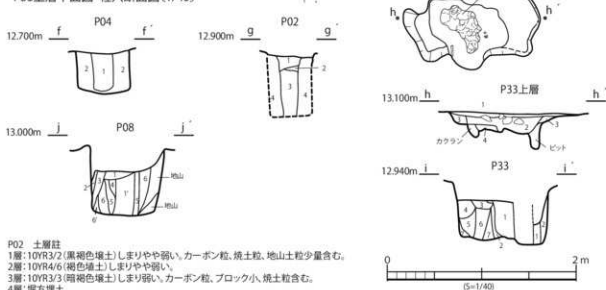
SI02全体エレベーション図 [1/80]

第8図 八幡遺跡 SI02 実測図

SI02A平面図・遺物出土状況図(1/80)



P33上層平面図・柱穴断面図(1/40)



P02 土層註

- 1層: 10YR3/2 (黒褐色埴土) しまりやや弱い, カーボン粒, 焼土粒, 地山土粒少量含む。
- 2層: 10YR4/6 (褐色埴土) しまりやや弱い。
- 3層: 10YR3/3 (暗褐色埴土) しまり弱い, カーボン粒, ブロック小, 焼土粒含む。

P04 土層註

4層: 庭方埋土

P08 土層註

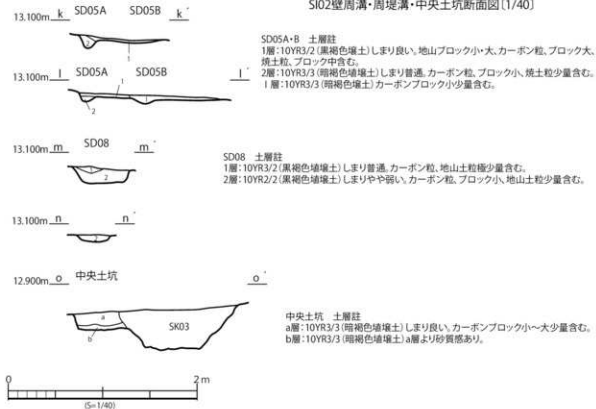
- 1層: 10YR2/3 (黒褐色埴土) しまり弱い, カーボンブロック少量含む, 遺物含む, 下底付近N1.5/(黒色) 炭だまり, ブロック状の個体で埋る。
- 2層: 10YR5/6 (黄褐色埴土) しまり良い, カーボン粒少量含む。
- P08 土層註
- 1層: 10YR4/2 (灰黄褐色埴土) カーボンブロック大, 焼土ブロック含む。
- 1'層: 10YR4/2 (灰黄褐色埴土) カーボンブロック大, 地山土ブロック含む。
- 2層: 10YR5/6 (黄褐色埴土)
- 3層: 10YR5/4 (にぶい黄褐色埴土) 10YR3/2 (黒褐色土) 含む。
- 4層: 10YR5/6 (黄褐色埴土)
- 5層: 10YR6/6 (明黄褐色埴土) 焼土ブロック少量含む。
- 6層: 10YR6/6 (明黄褐色埴土) しまり良い, 5層より粘性強い。
- 6層: 6層の柱穴部分付近に地山土ブロック。

P33上層 土層註

- 1層: 10YR3/3 (暗褐色埴土) カーボンブロック少量含む。
- 2層: 10YR3/2 (黒褐色埴土) カーボンブロック大〜小, 焼土ブロック多く含む。
- 3層: 10YR4/4 (褐色埴土) カーボン粒少量含む。
- 4層: 10YR6/6 (明黄褐色埴土) 粘土ブロック状。
- P33 土層註
- 1層: 10YR5/4 (にぶい黄褐色埴土)
- 2層: 10YR6/6 (明黄褐色埴土)
- 3層: 10YR3/3 (暗褐色埴土)
- 4層: 10YR5/4 (にぶい黄褐色埴土)
- 5層: 10YR5/6 (黄褐色埴土) 地山ブロック少量含む。
- 6層: 10YR5/6 (黄褐色埴土) カーボン粒少量含む。
- 7層: 10YR6/6 (明黄褐色埴土)

第9図 八幡遺跡 SI02A 実測図

SI02壁周溝・周堤溝・中央土坑断面図 [1/40]



第10図 八幡遺跡 SI02 実測図

も同じく硬化面が確認されている。確認された深さで約70cm～80cmを測り、下底面レベルが概ね12.1～12.2m前後に揃う点の特筆される。柱根部分は、灰黄褐～褐色土で埋まり、堀方は掘削した地山土の埋め戻しである。ただし、P 33 上層には、焼成粘土塊が中心部に集中して検出されている。これは、他の柱穴には見られない特徴であり、SI02Bへの建て替えの段階で廃棄坑として利用されたものとする。

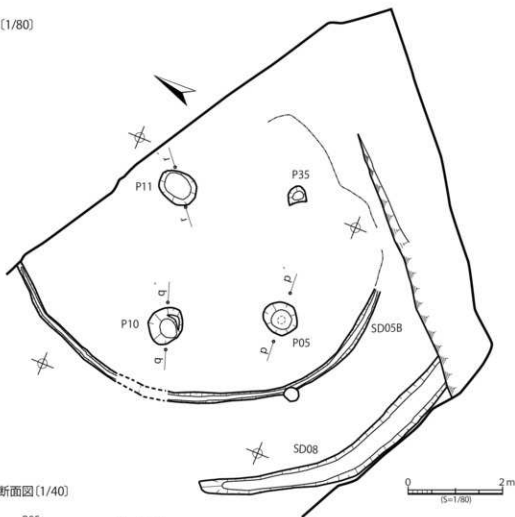
P 4～P 8間の中央に位置し、SK03に切られ半円形となっている土坑が中央土坑であると考えられる。深さ18cmと浅く、炭化物を少量含む暗褐色壤土で埋まっている。SD08とSD05Aの間は周堤があったと考えられる。SD08は、東に向かって床面レベルを下げている、排水溝として機能したと推察される。

建物検出時においてすでに床面に露出していた状況であり、出土遺物は少ない。柱穴内から極少量と、壁周溝及び周堤溝内の南東端に比較的集中して出土したが、どれも埋土中であり、建物の時期は特定できない。

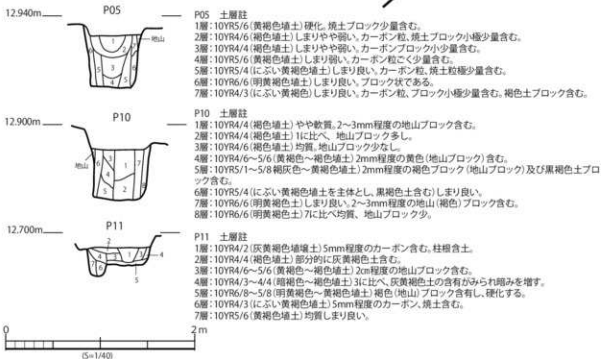
〔SI02B〕

平面形は楕円形であり、確認最大幅で7.67mを測る。壁周溝(SD05B)は、幅15～25cm、床面からの深さ5～9cm程度と若干細く浅くなっている。全周していたとみられ、SI02Aの内側に造作されることから、一回り小さく縮小されたことが推察される。床面は中央付近が最も高く、壁周溝側へと下る傾斜となっている。床面断ち割りにより、貼床が10～15cm程度確認されている。確認された支柱は4本で、方形配置に復元される。東からP 35・P 05・P 10・P 11が該当し、主軸はN-26°-Wとなる。柱間寸法は、P 35-P 05間が2.62m、P 05-P 10間が2.40m、P 10-P 11間が2.99mと広く、P 11-P 35間が2.48mで、やや台形状となる。柱穴の大きさは、

SI02B平面図〔1/80〕



柱穴断面図〔1/40〕



第11図 八幡遺跡 SI02B実測図

最大径 70～80cmを測る。柱穴の床面には、硬化面が確認されている。深さは、切り合いの影響が少ないP5とP10で約70cmを測り、この2穴は下底面レベルが概ね12.1mに揃う。しかし、東側のP11・P35は概ね12.6mで揃っており、東西で下底面レベルが約50cm異なっている。柱根部分は、灰黄褐～褐色土で埋まり、堀方に地山土のブロックが目立つ点がやや異なるといえよう。

周堤と溝(SD08)には変化がなく、おそらくSIO2Aのものをそのまま利用したと考えられる。

壁周溝からも柱穴からも遺物の出土はなく、明確な時期は判断できない。

(3) 掘立柱建物

① SB01

H-05Grに位置し、竪穴建物の支柱穴に該当しなかった柱穴を拾ったものである。東からP34(旧SK04)・P09・P36が該当し、主軸はN-44.5°-Eとなる。柱間寸法は、P34-P09間で2.53m、P09-P36間が4.29mと梁行きが広い。調査区外にも延びるため、全体形状は不明であるが、梁行き1間×桁行き1間以上の建物と考えられる。ただし、梁行きがかなり広いことから、建物跡としてよいか検討の余地は残る。柱穴の大きさは、最大径80～100cmを測るしかりしたもので、柱穴の床面には硬化面が確認されている。ただし、P34は柱根を抜き取られており、その際に広がったと考えられる。よって、埋まり方も他の柱穴とは大きく異なっており、黒褐色壤土が堆積している。P9は深さ約55cmを測り、下底面レベルは12.3mである。P34・P36は、下底面レベルが概ね12.5～12.6mである。

切り合いから、少なくともSIO2より後出といえる。しかし、出土遺物もなく、遺構として評価も確定できないことから、最後出の建物の可能性があるということに止めておきたい。

(4) 土坑

① SK06

C-04Grから検出された土坑である。直径で70cmを測る楕円形の掘り込みである。確認された深さは約18cmであり、浅く平坦な底面を持つ。覆土は、にぶい黄褐色系土(1層)で埋められている。遺物は、弥生土器片が1点出土しているのみで、詳細な時期は特定できない。弥生時代の遺構と判断されるが、切り合いからSD04より新しい遺構であることが確定である。

(5) 溝

① SD04

B・C-03～C-04Grに位置し、調査区外に延びる溝である。確認幅で65cmを測る溝であり、下底面に幅20cmの平坦部分が確認された。深さは12cm程度のみが確認された。覆土は、黒褐色壤土や埴壤土で埋まっている。遺物は、弥生土器片が1点出土しているのみで、詳細な時期は特定できない。切り合いから、SK06より古い遺構であることがわかる。

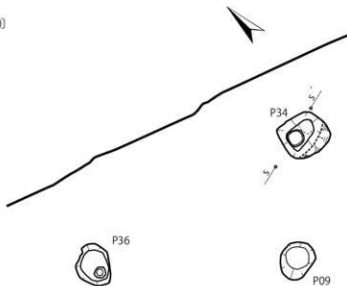
② SD06

G・H-05Grに位置する溝で、SIO1から南西方向に延びる溝である。生活面が削られている影響で、SIO2壁周溝より先はプランが確認できなかった。幅約35cm、深さ15cm程度で、確認範囲では一定幅を保っている。黒褐色壤土単層で埋っており、埴土ブロックを含んでいる。遺物は出土していないが、SIO1・02より新しい溝である。おそらく、平野部方向に向けて掘られたものであろう。

③ SD07

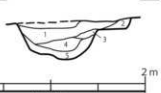
G・H-04Grに位置し、多くの遺構が切り合った箇所であり、溝ではない可能性も考えねばならない。確認幅で45cmを測り、深さは15cm程度のみが確認された。覆土は、黒褐色壤土で埋まって

SB01平面図(1/80)



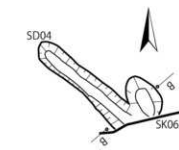
P34断面図(1/40)

12.900m S



P34 土層註

- 1層: 10YR3/2 (黒褐色壤土) しまり弱い、カーボン粒、ブロック小、焼土粒、地山土粒含む。
- 2層: 10YR4/3 (にぶい黄褐色埴壤土) しまり良い、カーボン粒、焼土粒極少量含む。
- 3層: 10YR2/3 (黒褐色埴壤土) しまり弱い、カーボン粒、焼土粒少量、地山土ブロック大含む。
- 4層: 10YR2/2 (黒褐色埴壤土) しまり弱い、カーボン粒、ブロック小、焼土粒、ブロック少量含む。
- 5層: 10YR3/2 (黒褐色埴壤土) しまりやや良い、カーボン粒、ブロック小、焼土粒少量含む。



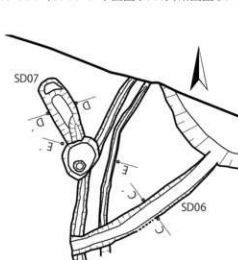
12.500m B SK06 SD04 B



SK06・SD04 土層註

- 1層: 10YR4/3 (にぶい黄褐色壤土) しまり弱い、地山粒、ブロック小多く含む、カーボン粒少量含む。
- 2層: 10YR3/3 (暗褐色埴壤土) しまり普通、地山土粒含む、カーボン粒少量含む。
- 3層: 10YR4/4 (褐色土) に10YR3/3 (暗褐色壤土) 混入。
- 4層: 10YR4/6 (褐色土) に地山か
- 5層: 10YR3/2 (黒褐色壤土) しまり良い、カーボン粒少量含む。
- 6層: 10YR3/3 (暗褐色埴壤土) しまり良い、地山土粒、ブロック少量含む、カーボン粒極少量含む。

SK06・SD04、SD06・07平面図(1/80)、断面図(1/40)



13.100m C SD06 C



SD06 土層註

- 1層: 10YR3/2 (黒褐色壤土) しまり普通、カーボン粒、ブロック中、焼土ブロック中、地山土ブロック少量含む。
- 2層: 10YR4/2 (灰黄褐色埴壤土) しまり良い、地山土ブロック大少量含む。

13.100m D SD07 D



13.100m E SD05 SD07 E



SD07 土層註

- 1層: 10YR3/2 (黒褐色壤土) しまり普通、カーボン粒極少量、地山土粒少量含む。
- 2層: 10YR3/4 (暗褐色埴壤土) しまりやや弱い、カーボン粒極少量、地山土、ブロック小含む。
- 3層: 10YR4/3 (にぶい黄褐色埴壤土) しまり良い、カーボン粒極少量、地山土、ブロック小少量含む。

第12図 八幡遺跡 SB01、P34、SK06、SD04・06・07実測図

いる。遺物は、弥生土器片が1点出土しているのみで、詳細な時期は特定できない。切り合いから、P 36より新しい遺構である。

(6) ビット

前述のとおり、殆どがC Grに分布しており、P 13～15・16・18～20・23～26・29～31より遺物が出土している。いずれも小穴であり、その性格は不明である。

3 古墳時代の遺構

(1) 古墳

① 八幡6号墳(SD01)

DE-04Grに周溝の一部が掛かる状況で検出され、確認最大幅で約2.9m、最深部で深さ約1mを測る。今回、この位置で周溝が確認されたことにより、前方後円墳であることが確定している。検出部分は、前方部の北西隅部と考えられ、古墳全長(周溝幅含む)は55m前後、墳丘幅47m前後と推察される。周溝の立ち上がりが急で、底面は平坦に造作されている。前方部調査時において確認された構造と合致している。溝の堆積土中から出土した古墳時代遺物は、図示した高坏の脚部とみられる破片のみである。むしろ弥生土器片と古代土器片の方が多く出土している。隣接する弥生時代遺構からの流れ込みと、県調査区で検出された奈良時代小規模集落から流入したものではないかと考えられる。周溝は、中世段階に利用される頃までには殆ど埋まっており、20cm程度凹んだ状態であったようだ。県調査区で確認された新たな溝の掘込はなく、凹みそのまま利用されている。

その構築時期の特定については、県調査の段階から課題とされており、出土遺物から5世紀初頭と6世紀後葉の時期が提示されるに留まっている。唯一の小型高坏片をもって5世紀初頭と決定するのは困難である。よって、本調査によっても、時期の確定には至らなかった。

(2) 土坑

① SK03

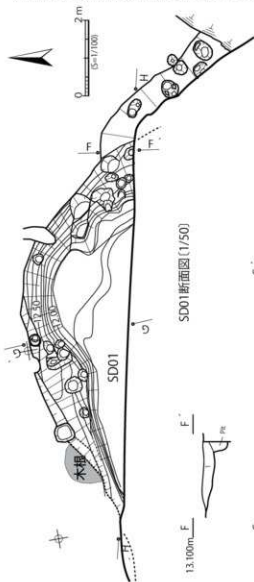
H-05Grに位置し、全長296cm・幅131cmを測る長方形の土坑である。深さは、約40cm分が確認され、土坑の壁面はやや傾斜した形態である。この部分が掘方にあたると考えられ、内部に全長180cm・幅67cmの土坑が復元された。断面からは、南側と西側に掘方埋土が確認されたが、北側と東側は上位遺構との切り合いなどを要因として掘方部分は確認できなかった。特に、西側は褐色粘土(地山)ブロックを含む土による埋め立てが確認された。遺構の時期は、遺物が出土おらず特定はできないが、弥生時代後半～終末の住居の上に構築されており、それ以降であることは判断できる。また、6号墳の墳丘下でも同種の遺構が検出されていることから、6号墳構築前である可能性も考えられる。おそらく、県調査時に土坑墓・木棺墓として報告されたものと同種の遺構と推定される。よって、ここでは県調査報告と同様に、古墳時代の遺構として報告を行った。

4 古代の遺構

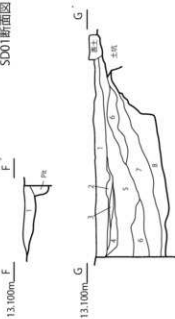
(1) 古代遺構の概要

当該調査区内には、八幡6号墳周溝(SD01)から出土した奈良時代遺物に対応する遺構はなく、県調査区における小規模集落跡からの流入とみられる。ただし、調査区中央で検出されたビットは、平安時代の遺構であることは確実であり、単独で存在する。他には、確実な古代遺構は検出されておらず、このビットの持つ意味は不明と言わざるを得ない。

SD01 平面図 (1/100)

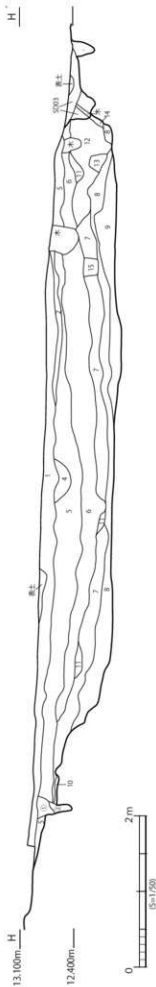


SD01断面図 (1/50)



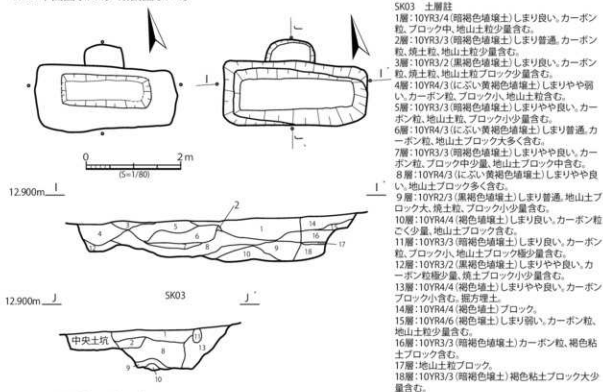
SD01 土層注

- 表土: 10YR4/3 に近い黄褐色土(淡黄褐色粘土ブロック多く含む)
 1層: 10YR5/6 (黄褐色土) しまりやや弱い、カーボン少量含む。
 2層: 10YR3/3 (暗褐色土) しまりやや弱い。
 3層: 10YR3/2 (暗褐色土) しまり強い、カーボンブロック少量含む。
 4層: 10YR2/1 (黒褐色土) カーボン多量含む、骨片、炭土粒、ブロック含む。
 5層: 10YR3/2 (暗褐色土) しまり強い、カーボン粒、褐色土塊少量含む。
 6層: 10YR3/2 (暗褐色土) しまり強い、カーボン粒、ブロック、褐色土塊少量含む。
 7層: 10YR3/4 (暗褐色土) しまりやや弱い、カーボン粒、ブロック少量含む。
 8層: 10YR3/4 (暗褐色土) しまり強い、カーボン粒、ブロック少量含む、褐色土粒、ブロックへ中含む。
 9層: 10YR3/7 (黒褐色土) しまり普通、褐色土粒、ブロック、カーボン粒少量含む。
 10層: 10YR4/2 (黒褐色土) しまり普通、カーボン粒、砂少量含む。
 11層: 10YR2/2 (黒褐色土) しまりやや弱い、褐色土塊少量含む。
 12層: 10YR3/3 (暗褐色土) と 10YR4/4 (褐色土) が吸状に混ざる層、カーボン粒、砂少量含む。
 13層: 10YR4/4 (暗褐色土) 地山層土が同じ。
 14層: 10YR4/4 (暗褐色土) 地山層土が同じ。
 15層: 10YR4/3 (暗褐色土) しまりやや弱い。
 ①層: 10YR4/3 に近い黄褐色土(塊状)に混ざる層、カーボン粒、砂少量含む。
 ②層: 10YR4/3 に近い黄褐色土(塊状)に混ざる層、カーボン粒、砂少量含む。
 1層: 10YR3/3 (暗褐色土) しまりやや弱い、カーボン粒、地山土少量含む。
 PR: 10YR3/3 (暗褐色土) しまりやや弱い、カーボン粒、地山土少量含む。

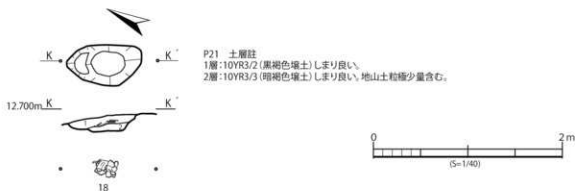


第13図 八幡遺跡 SD01 実測図

SK03平面図〔1/80〕・断面図〔1/40〕



P21平面図・断面図〔1/40〕



第14図 八幡遺跡 SK03、P21 実測図

① P 2 1

D-03Grに位置し、直径63cmを測る楕円形ビットである。2層直上部分に同一個体の破片が集めた状態で出土している。土師器裏約1/2個体分の破片であり、平安時代の遺構である可能性が高い。その個体と接合する破片が、弥生時代遺構のS102の柱穴より出土しており、何らかの作用により混入したものとしか判断できない。

同じくS102内で検出されたP12からも古代土器片は出土しているが、古代遺構かどうかは確定できない。

5 中世の遺構

(1) 中世遺構の概要

前述のとおり、中世の遺構は八幡6号墳の周溝に重なるように造営された中世墓群である。一部の土坑・ビットは、周溝内を外れているが近接しており、同種のもつと判断される。これは、県調査に

おいても同様で、6号墳後部北側周溝内に造営されている。今回検出されたものも、これに続くものと推察される。県調査では、明確に墓坑とは判断していなかったが、今回火葬骨片が確認されたことから、墓であると判断できる。また、県調査SK119からは、五輪塔地輪2点、火輪1点が出土している。さらに、6号墳北方表土から加賀型宝塔の相輪が出土しており、国府推定地周辺の分布域の広がりとして注目される。配石墓ではなく土坑墓を中心とする階層にも、石塔を造立可能な人物いたことが考えられる。

また、立地から、八幡6号墳を意識した占地をしていることは確実といえる。さらに、その北側のみにあるということは、平野部を見渡す位置でもあることが重要なようである。八幡古墳群の内、1号墳には「行者塚」、4号墳には「中塚」、6号墳には「大塚」の異名が残っていた。よって、中世段階においても、八幡6号墳は「塚」として存在し、当該地を聖地とする機能を有していたのであろう。被葬者層には、能美荘における名主層などが想定される。

(2) 墓

① SX01

D-0 4Grの周溝内に位置し、確認長77cm、幅60cmを測る土坑である。深さ16cm程度で、極浅いものである。確認面の北東隅部において、礫と炭化材集中箇所が確認された。埋土中にも炭化物片を多量に含んでおり、極少量ではあるが火葬骨片も含んでいる。骨片は、墓壇埋土25.05kgに対し、骨片は18.47gしか含まれておらず、含有率は0.074%であり主要な骨片は含まれていない。別の地点で遺体が茶埋に付された後、主要骨片が収骨され、残った炭とともに集められ、埋められたと推察される。八里向山H遺跡でも、大きな骨片がなく細かい骨片を含む土のみで構成された配石墓があり、本遺跡のものも墓の一種であると考えられる。墓の構築時期は、墓壇前面から出土した土師器皿がⅣ-Ⅰ期（藤田編年）頃と推察され、14世紀後半～末頃の年代とみられる。ただし、墓壇に近い位置から、やや下ると考えられる土師器皿も出土しており、造墓は、15世紀初めころまで継続していた可能性も考えられる。

② SX02

E-0 4Grの周溝内に位置する。直径約25cmの範囲に集中した骨片である。SX01確認面より上位に位置し、断面にも掘り込みの跡が確認できないことから、遺棄葬のように骨を置いただけのものと判断される。ただし、全ての部位があるわけでもなく、火葬され収骨されたものが墓壇を掘ることもなく、その場に置かれたと推察される。また、円形状に集中していることから、有機質材の容器に入れられていたものであろう。骨は、大型部位を中心に集められたようである。頭蓋部分を含む一方で、総重量で260gを測る。SX01と同層位内にあることから、一連の造墓活動の範疇で行われたものと考えられる。明確な墓を造らない葬法が併存していたようである。

(3) 土坑

① SK09

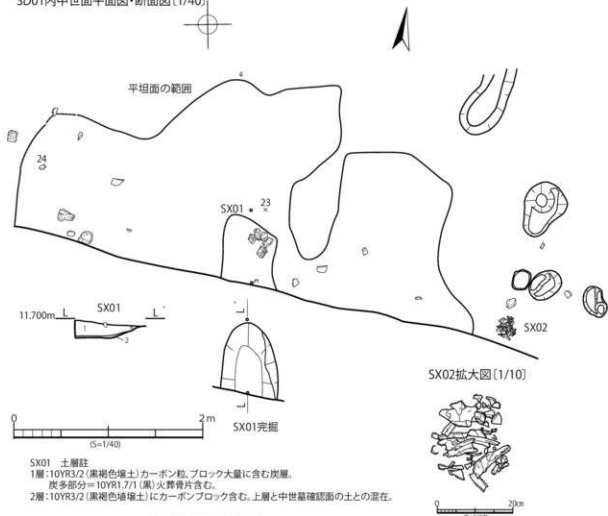
D-0 3Grに位置し、セクション部分で全長185cmを測る土坑である。平坦な底面を持ち、深さ25cm程度の浅いものである。覆土は褐色や暗褐色埴壇土層が主体であり、礫を含んでいる。南西隅部に礫の集中箇所があり、越前焼裏の陶片が含まれていたことから中世遺構と判断した。骨片などは出土しておらず、墓壇ではないと考える。

(4) ビット

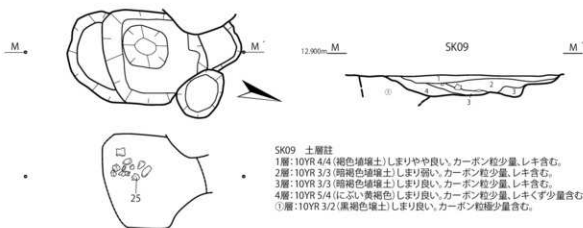
① P32

八幡6号墳周溝外側で検出された小穴で、土師器小皿1個体が出土しており、中世遺構と考えられ

SD01内中世面平面図・断面図(1/40)



SK09平面図・断面図(1/40)



第15図 八幡遺跡 中世墓(SX01・02)、SK09実測図

る。八幡6号墳周溝や中世墓に近接しており、関連遺構の可能性もあろう。土師器皿の時期(藤田編年Ⅳ-I期)からみても、同時期と推定される。

6 近世の遺構

(1) 近世遺構の概要

本調査区は、八幡6号墳の墳丘上に造られていた再興九谷若杉窯（八幡若杉窯跡、連房式登窯）の背面東側に位置している。よって、窯跡に近いグリッドからの近世遺物出土が多く、特にC・D Grの量が多い。出土遺物も窯跡に関連したものが主体であり、窯道具が多く出土している。その出土遺物の多さに比して、明確な近世遺構は少なく、SD03とP22のみである。

(2) 溝

① SD03

C-03GrからD-04Grにかけて検出された溝で、セクション上端部幅で58cmを測る。底部の狭いV字型に掘られた溝で、D-04Grで調査区外へ向けて直角に折れている。上層覆土には、焼土ブロックが混入していた。遺物は、八幡窯関連の製品や窯道具類が出土している。区画ないし、雨水等の排水溝ではないかと考えられる。

7 時期不明遺構

(1) 土坑

① SK01

E-03Grに位置する土坑である。長辺120cm、短辺112cmを測る隅丸方形型の土坑である。深さ12cm程度が残存するのみだが、埋土を全て除去すると、3箇所の深くなる部分が確認された。埋土は褐色埴壇土で小礫を含んでいる。上位の確認面では、炭化物集中した炭層部分が確認されており、長径92cm、短径50cmの楕円形掘込部分が確認され、焼却灰の片付け坑であろう。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

② SK07

D・E-03Grに位置する土坑である。検出された土坑の中では、特異な埋まり方している。全て黄褐色系統の土で埋まり、1層置きに2・4・6・8層の同系統の土が埋め戻しに使用されている。おそらく埋め戻しには地山を素材とする土、つまり掘り返した土をそのまま使用したと考えられる。また、掘った後、あまり時間を置かず埋められたものと推察される。遺物は出土しておらず、その用途は不明である。

(2) 溝

① SD02

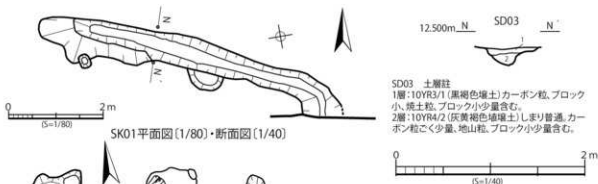
E-03・04Gr、ほぼ調査区中央に位置する溝である。崖面に対して直直し、丘陵側が一段深くなっている。幅約40cm、深さ15cm程度の浅いものである。西壁が立ち、東岸に向い緩やかに傾斜して立ち上がる構造から、鍬などを西岸側に刺し、東岸に向かって引き上げたこととみられ、畑などの畝溝とも考えられる。SD01を切っていることから、八幡6号墳埋没後であることはいえる。ただし、遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明である。

(3) 小穴

① P03

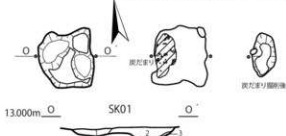
H-05Gr位置する小穴で、内部より火葬骨片が集中して出土している。集中区域は、円形状にまとまっており、おそらく曲物等の有機質容器に入れられていたことが考えられる。その容器の大きさは、21cm×26cmの楕円形状で深さ11cm程度に復元可能である。土層断面から、容器より一回り大きく掘った穴に安置したことが推察される。骨は、棒状の部位が非常に多く、選別されたようで

SD03平面図(1/80)・断面図(1/40)



SD03 土層註
 1層:10YR3/1(黒褐色埴土)カーボン粒、ブロック小、炭土粒、ブロック小少量含む。
 2層:10YR4/2(灰黄褐色埴土)しまり普通、カーボン粒ごく少量、地山粒、ブロック小少量含む。

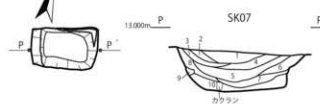
SK01平面図(1/80)・断面図(1/40)



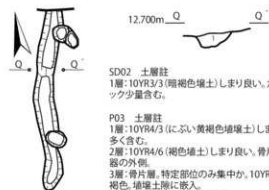
SK01 土層註
 1層:10YR1.7/1(黒色埴土)炭層、カーボンブロック大多く含む。
 2層:7.5YR4/3(褐色埴土)小しき含む埋土。
 3層:10YR4/6(褐色埴土)壁面崩落土。

SK07 土層註
 1層:10YR4/2(灰黄褐色埴土)を主体とし10YR8/3粘土ブロック含む。しまり良い。
 2層:10YR6/6(明黄褐色埴土)しまり弱い。2.5Y8/2ギレキ小含む。
 3層:10YR5/6(黄褐色埴土)しまり弱い。ギレキ小少量含む。
 4層:10YR5/3(にぶい黄褐色埴土)しまり弱い。ギレキ含む。
 5層:10YR4/3(にぶい黄褐色埴土)しまり弱い。7.5YR5/6(粘土)ブロック粒含む。
 6層:10YR8/3(淡黄褐色埴土)しまりやや強い。粘土層少量存在。
 7層:10YR5/4(にぶい黄褐色埴土)しまり弱い。やや砂質感あり。
 8層:10YR6/6(明黄褐色埴土)しまりやや強い。ギレキ少量含む。
 9層:7.5YR5/6(明褐色粘土)ブロック。
 10層:10YR5/6(黄褐色埴土)しまり弱い。カーボン粒極少量含む。

SK07平面図(1/80)・断面図(1/40)



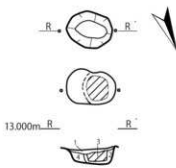
SD02平面図(1/80)・断面図(1/40)



SD02 土層註
 1層:10YR3/3(暗褐色埴土)しまり良い。カーボンブロック少量含む。

P03 土層註
 1層:10YR4/3(にぶい黄褐色埴土)しまり良い。骨片多く含む。
 2層:10YR4/6(褐色埴土)しまり良い。骨片多く含む。容器の外側。
 3層:骨片層。特定部位のみ集中か。10YR4/3に近い黄褐色埴土層に嵌入。
 4層:10YR3/3(暗褐色埴土)。

P03平面図(1/40)・断面図(1/40)



第16図 八幡遺跡 SD03、SK01・07、SD02、P03実測図

ある。総重量 605.2g あり、今回発見された骨片出土遺構のなかで最も多い量である。遺物が出土していないことから、時期は特定できない。八幡6号墳からも離れていることから中世墓と同時期ではない可能性も考えられる。

第3節 出土遺物

1 はじめに

当該調査区の出土遺物の内訳は、弥生時代遺物 166 点、古墳時代遺物 1 点、古代遺物 10 点、中

世遺物4点、近世遺物87点である。約62%が弥生時代遺物で占められる。

2 弥生時代後期後半～終末期の遺物

当該期の遺物は、前述のとおり最も出土量が多い。しかし、小片のみであり、実測できたものは少ない。また、最も多く出土した遺構も、S D O 1（八幡6号墳周溝）であり、集落の時期や変遷について評価を確定することは困難である。

(1) S I O 1出土遺物（第17図1）

大型壺の頸部とみられる破片である。突帯状に粘土紐を巻き付けた後、刻みを入れたようである。特に、内面器表面の剝離が激しい。時期は、法仏末～月影1期頃とされる。

(2) S I O 2出土遺物（第17図2～5）

図化した2点とも壁周溝（S D O 5 A）から出土した遺物である。2は、高坏の口縁部小片であり、口径17.6cmに復元される。外面にはヘラミガキされており、沈線状の痕跡が薄く残り、円形のスタンプ文の痕跡もみえる。内面も丁寧にヘラ磨きされており、精緻な作りといえる。胎土には、海綿骨針が含まれており、搬入品と考えられる。内面には炭素が吸着しており、黒色を呈する。3は、甕の頸部片であり、口径は17.3cmに復元されている。外面にはヘラ状工具で列点文を刻み、内面の体部はヘラケズリ調整される。小礫が目立つやや粗い胎土である。時期は、両者とも法仏末頃とされる。

周溝溝（S D O 8）からは、2点図化している。4は小型壺の底部であり、底径4.2cmを測る。外面にはハケ調整が施されている。南加賀の胎土である。5は、甕の底とみられる破片である。外面に焼成時の黒斑が観察される。

(3) S B O 1出土遺物（第17図6）

P 34から出土した壺の頸部破片である。外面にはヨコナデ調整の痕跡が残る。径部径は、9.6cmに復元される。

(4) ビット出土遺物（第17図7・8）

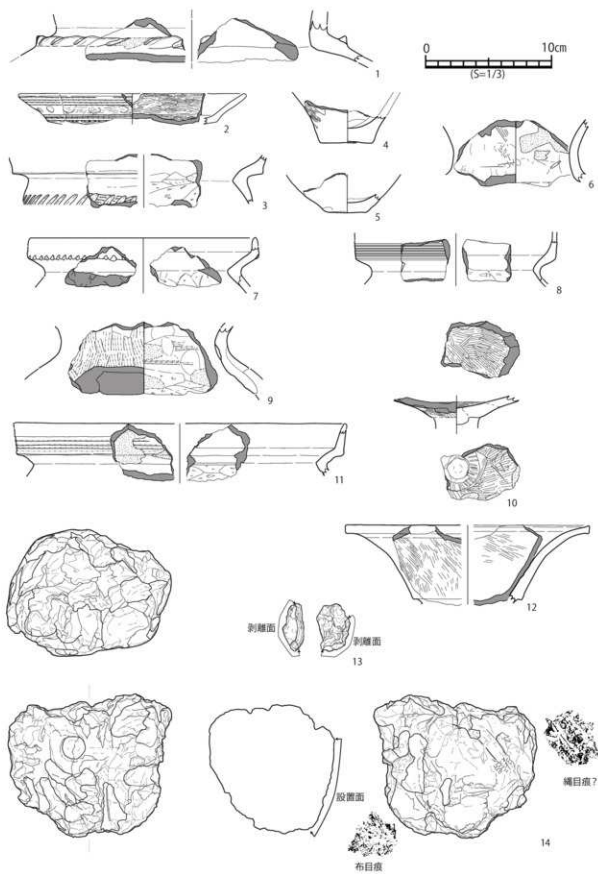
7はP 15出土で、甕の頸部破片である。有段口縁の段部に列点状に刻みが入る。体部内面はヘラケズリされる。8はP 18出土で、甕の頸部破片である。有段口縁の部分に擬凹線が施される。原体は貝殻である。時期は、両者とも法仏末期頃とされる。

(5) S D O 1出土遺物（第17図9～12）

前述のとおり、古墳造成などに伴う流入遺物であると判断される。9は壺の頸部破片である。外面ハケ調整、体部内面ヘラケズリ調整を施している。10は高坏で、脚部との接合部分の破片である。坏部見込み部中央は、円盤充填により閉塞されている。内外面を丁寧にヘラミガキする精製品である。接合痕から、脚部径約3.6cmに復元される。11は甕の口縁部破片であり、有段口縁外面に擬凹線を施す。体部内面は、ヘラケズリ調整を施している。口径は推定復元値で26.3cmとなる。以上は、法仏末～月影1式頃とされる。12は、器台受部と考えられる破片である。口径は、推定復元値で19.4cmに内外面にミガキ調整が施されるが、器表面の剝離が著しい。胎土もやや粗い印象を受ける。これらの遺物の時期は、S I O 1・O 2で出土した遺物と齟齬はないといえよう。

(6) 焼成粘土塊（第17図13・14）

遺跡内で土器焼成が行われた可能性を示す遺物として掲載する。13は小さいもので、S I O 2 Aの柱穴P 4埋土から出土している。14は、S I O 2 Aの壁周溝内から出土している。設置面には黒斑が付き、指ナデ・指オサエ・布目・縄目？等さまざまな痕跡が器表面に残っている。P 33の出土状況からも、S I O 2 Aの建替え時の埋土に混入したか、廃棄したものと考えられる。



第17圖 八幡遺跡 出土遺物実測図1 (1/3)

(7) 石器 (第18図15・16)

15は、SD01から出土した、緑色凝灰岩製の石核である。玉造関係遺物として注目される。16は、流紋岩製の砥石である。3面を砥面として使用した痕跡が確認される。当該期に属する砥石ではない可能性もある。

3 古墳時代の遺物**(1) SD01出土遺物 (第18図17)**

土師器高環の脚部とみられる破片が1点出土している。焼成はやや甘く、剥離・磨滅があり外面調整は不明である。内面は、脚部から裾部に広がる部分でヘラケズリ調整が残る。形状から漆町編年11群頃を想定するが、小片のため断定はできない。県調査区の結果からも、当該期の遺物は古墳群と関連したものと考えられる。

4 古代の遺物

当該期の遺物は少なく、殆どが流入遺物である。

(1) P21出土土器 (第18図18)

土師器ロクロ甕の約1/2個体である。端部は若干上方に摘み上げ、外側にやや引き出す形態をしている。非常に薄手で、砂粒の少ない精良胎土が使用されている。ロクロ整形、底部叩き出し、外面カキメ調整を経て成形されている。また、外面には煤や焦げが付着しており、器表面の剥離もみられることから、多くの使用を経たものと考えられる。時期は、口縁部形態からVI期以降と考えられる。

(2) P12出土土器 (第18図19)

土師器ロクロ甕の口縁部破片である。口径は24.5cmに復元されているが、小片のため確定ではない。端部を折り曲げる形態であり、Ⅲ～Ⅳ期の時期が考えられる。器壁は剥離があり、焼き締まりは甘い。

(3) SD01出土土器 (第18図20)

須恵器環B蓋の摘みである。SD01は八幡6号墳周溝であり、県調査区からの流入とみられる。偏平な形態であり、おそらくⅡ3～Ⅳ1頃までのものであろう。南加賀産であり、裏面に墨の付着が認められる。

(4) 包含層出土遺物 (第18図21・22)

2点を図化している。21は須恵器盤Aで、胎土は南加賀産である。口径が14.4cmと小さくなっており、立ちあがり外傾することから、V1期頃のものと考えられる。底部は、回転ヘラ切り痕がそのまま残り未調整である。

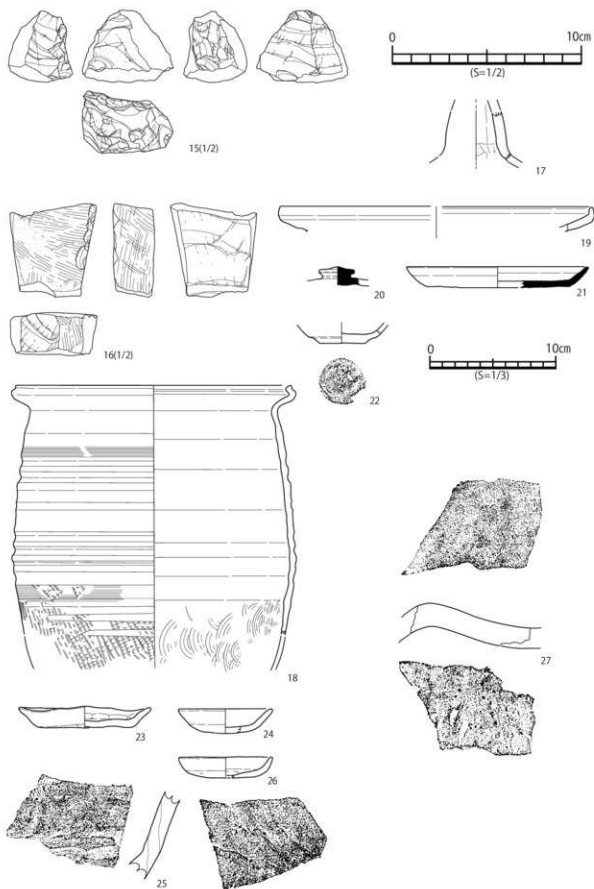
22は土師器ロクロ皿底台小皿の底部である。精良胎土で焼成も良く、橙色に発色をしている。底部に回転系切痕が残る。底径から、Ⅶ2新时期が推定されるが、時期の特定は難しい。

5 中世の遺物

中世の遺物は、SD01内の中世墓群と周辺遺構から出土した遺物のみで、包含層からは出土していない。

(1) 中世墓群周辺出土土器 (第18図23・24)

23・24は非ロクロ土師器皿である。23は、1/3程度の残存で、胎土は他の2点に比して若干粗めである。口径10.5cmのものとして復元図化しており、体部外反平底器形である。焼き込みが大きく、橙色に発色している。内面や外底部には、指オサエ痕が明瞭に残っている。おそらくEタイプの最終



第18図 八幡遺跡 出土遺物実測図2 (15・16は1/2、ほかは1/3)

形態であり、末松A6埋納ビット出土土器に類似し、藤田編年Ⅳ-1期頃と考えられる。24は、口縁部から体部にかけての小片であり、口径7.5cmに復元される。体部はヨコナデにより外反し、底部は丸底気味で器肉も厚めである。焼成は良好で、にぶい黄橙色を発する。体部外反と丸底化傾向は見えるが、普正寺中・上層段階までに至っているとはいえない。よって、Ⅳ-1期～2期の間に位置づけられ、1よりやや後出する資料と考えておきたい。

(2) SK09出土陶器 (第18図25)

越前窯大甕の胴部下半の破片である。焼締まりは良く、内部はナデ痕、外部はヘラによる調整痕が残っている。6cm角程度の小片であるため、時期は不明である。

(3) P32出土土器 (第18図26)

非ロクロ土師器皿で、胎土は精良であり、にぶい黄橙色を発する。口径7.4cmを測り、体部は外反せずやや内湾気味に立ちあがる。見込み中央に向い、器肉が薄くなっており、一方ナデ痕が明瞭に残る。底部外面は、ナデツケのみで無調整に近い。時期は、1と同じⅣ-1期頃と考えている。

6 近世の遺物

近世末期の再興九谷八幡若杉窯の生産に関連した遺物である。本調査区は窯跡と物原の背面にあたることから、廃業後の畑地開墾により散逸したものと推察される。遺構出土遺物は僅かで、全体の1割程度である。内訳は、大部分が窯道具であり、製品は少ない。また、製品のなかでも日常雑器が大部分である傾向は、県調査区と同様である。ただし、包含層遺物については、他産地の遺物が混入していないとは言いきれず、八幡若杉窯の製品とは断定できない。

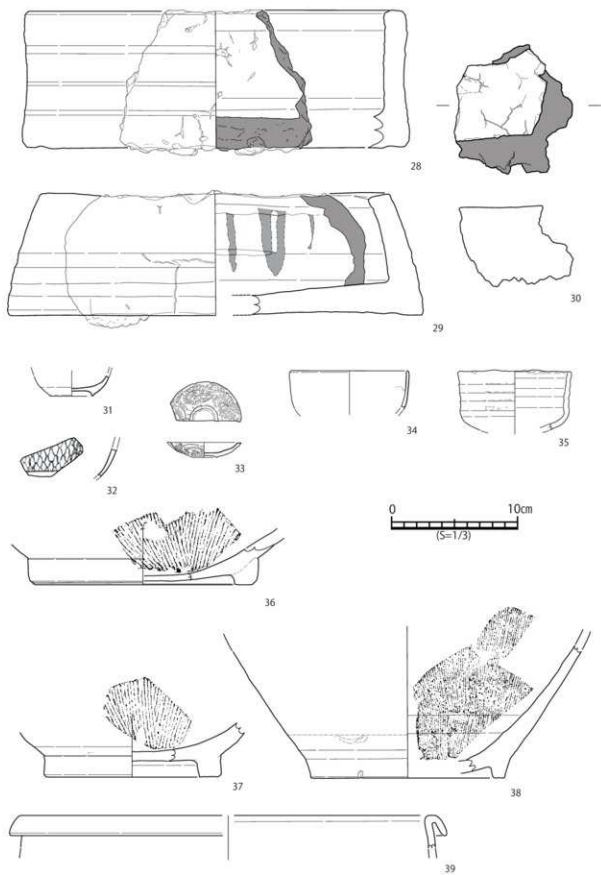
(1) SD03出土遺物 (第18・19図27～30)

27は棧瓦片であり、表裏両面に酸化鉄溶液を軸葉として塗布されている。軸葉塗布面は、にぶく光沢がない状態である。28・29は窯道具のサヤで、両者とも陶胎である。器壁が厚いためか焼歪みがあり、製品を収め窯に設置する際に、粘土玉を底に貼り付け、水平を調節したとみられる。28は、口径29.6cm、高さ10.8cmで体部が直立するものである。29は、口径27.7cm、高さ9.6cmで体部が内屈するものである。両者とも皿の焼成に使用されたものと考えられる。30は磚であり、窯の構築部材であると考えられる。確認厚で6.3cmあり、分厚い部材であることがいえる。

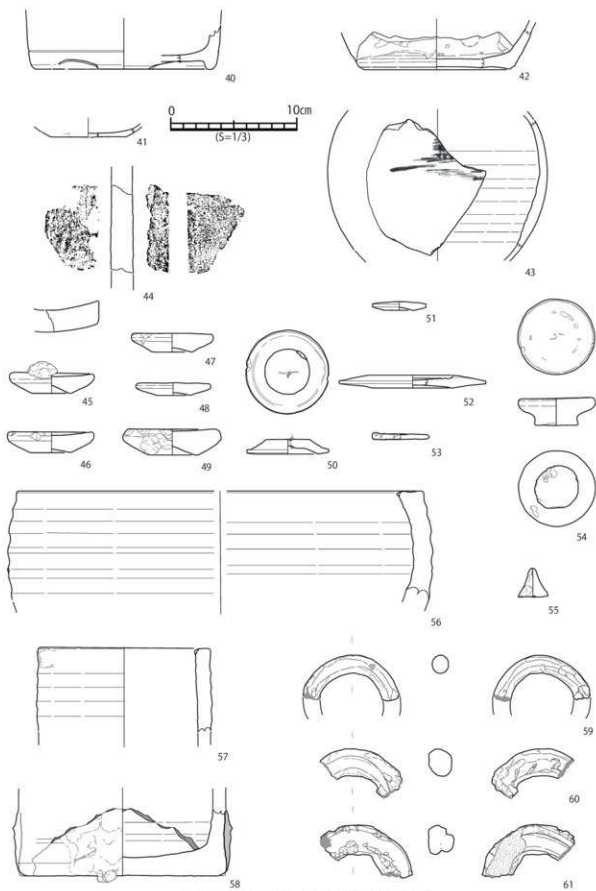
(2) 包含層出土遺物 (第19・20図31～61)

製品では、磁器は少なく、陶器が主体を占める。31は、白磁の小碗で、厚い軸が掛かり、透明感があり状態は良い。高台は削り出しで、碁笥底状を呈す。32は、赤絵磁器碗であり、一重網目文が体部外面に隙間なく描かれている。33は、口径5.1cmを測る紅皿であり、内面と口縁端部が施釉される。外面の一部には垂れた軸が付着している。外面には近世町屋などから多く出土している花卉ではなく、蛸唐草文様が浮き彫りされる。

34・35は、陶器碗であり、両者とも口縁部から体部にかけての小片である。34は薄作りで、口径は9.2cmに復元される。体部外面から体部内面中位にかけて施釉され、明黄褐色に発色している。35は筒型碗系の器形で、体部をヒダ状に装飾している。口径は、9.0cmに復元される。軸葉は薄掛けで、オリブ灰色を呈する。播鉢は3点を図化した。36・37は、素焼後の破片であり、体部下半から高台及び底部外面まで鉄化粧が施される。貼り付け高台であり、内面に隙間なく卸目が付けられている。36は、10条1単位で、1cmあたり4条の密度である。37は、同じく10条1単位だが、1cmあたり5条の密度であり、やや細い工具が使用されている。38は本焼された製品であり、外面及び内面に鉄釉が施されている。卸目は、14条で1単位であり、1cmあたり8条と密である。高台の置付のみ



第19図 八幡遺跡 出土遺物実測図3 (1/3)



第20図 八幡遺跡 出土遺物実測図4 (1/3)

を無軸にしており、素焼品の型式とは異なるものである。39は鉢の口縁部で、素焼段階のものである。口径が32.8cmに復元されることから、火鉢の可能性も考えられる。40は、植木鉢の底部破片とみられ、高台数箇所に挟りが入られる。おそらく底部中央に孔が開けられていると考えられる。これも素焼段階のものである。41は、無軸の灯明皿の底部と考えられる。薄手であり、底部に回転糸切痕が残る。42は壺の底部と考えられ、本焼された製品である。外底部を除き、内面見込みまで施軸されている。比較的厚みのある鉄軸であり、光沢のある黒色に発色している。43は瓶系の体部とみられ、体部外面に絵付けが施されている。全体には灰白色に発色する軸葉が掛けられており、内面は非常に薄い。絵は褐色に発色しており、水墨画のような描き方である。おそらく建物を題材としていると思われる。このような絵のモチーフは、植木鉢にみられるようで、瓶ではあまり確認されないようである。(註1)

44は椀瓦片であり、右端部の破片である。酸化鉄軸は灰赤色に発色し、にぶく光る。おそらく八幡産の瓦片であろう。

45～61は窯道具である。45～53はハマであり、51～53が磁胎である。45～49は、陶胎の断面逆台形で底部側を円錐形に削り込んだ器形である。上面径6.5～6.9cmのものが多い。上面径6.0cm、高さ1cmの小型のもの(48)と、上面径7.8cm、高さ2.1cmの大型のもの(49)も存在する。その中で上面を2～3ミリ凹ますもの(45・46・49)と、平らなもの(47・48)がある。また、50のような逆皿形のものもあり、中央付近に紐?を通してあったようであり、繊維質の物質が残っている。高台の設置面とみられる位置には、橙色に発色した帯状の痕跡が残る。磁胎のものは、形態が様々である。51は、単純な円盤状で、直径4.6cm、高さ0.6cmの小型品である。52は、算盤玉を薄く潰したような形状で、直径11.6センチを測る。中央部分はヘラで削りとった痕跡が残る面と、平滑に窪ました面となっている。53は陶胎の3に近い形状で、直径4.2cmを測る。上面を円弧状に盛り上げる形態である。

54はシノで、陶胎である。直径6.1cm、高さ2.3cmを測り、上面には直径約4cmの高台が接地していた痕跡が残る。55はハリで、底径2.4cm、高さ2.3cmの円錐形である。56～58はサヤで、陶胎である。口径32cmに復元される大型の56と、口径13.7cmや底径16.9cmに復元される小型品用の57・58が存在している。58は内面見込み部に灰が被った状態である。59～61は輪トチである。概ね直径8～10cmの円に復元される。59はやや細く、設置時の高さ1.3cmで、60は高さ1.8cmを測る。61は、粘土紐を2本重ねたもので、高さ2.0cmを測る。

第4節 小結

今回の調査結果は、約20年前に実施された(社)石川県埋蔵文化財保存協会によって実施された結果と概ね合致するものである。弥生時代後期後半から終末期の建物跡については、丘陵北端部に多く確認されている前半期集落の一群と考えられる。この一群の中でも3回程度の建替えが認められ、円形の竪穴建物から方形竪穴建物、最終的に掘立柱建物が立てられたようだ。しかし、遺物の様相から、空白期を挟んで成立する後半期集落に該当するものは存在しないと考えられる。

八幡古墳群については、八幡6号墳が円墳ではなく、前方後円墳であったことが確定されたことが大きな成果といえる。時期については、今回の調査でも確証は得られておらず確定できなかった。ただし、これまで想定されている5世紀初頭頃である可能性が若干高まったといえるか。そうであるならば、八幡古墳群において最初に造られた古墳となる。

古代については、県調査区で確認された奈良時代遺構は確認されず、平安時代の小穴が単独で確認

されたのみである。眼下の平野部には、佐々木ノテウラ遺跡や佐々木アサバタケ遺跡で平安時代の遺構が確認されている。特に、後者では初期貿易陶磁器である越州窯青磁や軒平瓦片が出土しており、対岸に所在したと推定される国衙との関係性も示唆される集落跡である。八幡遺跡調査区では、南側の調査区に10世紀前半頃とみられる土坑（SK20）が単独で検出されており、内黒土師器皿が出土している。形状から土坑墓（土葬）と考えられているが、確認はない。近接して時期不詳の焼土坑も2基確認されているが、その性格を判断するには物証が乏しく、火葬と結びつけるのは困難である。本調査区の遺構も土坑（SK20）と同時期とみられるが、骨片等の出土はなく、葬送関連遺構とはできない。平安時代の墓制が不明瞭な現状においては、前述の集落遺跡と関連した墓地とするには確認はなく、どのような土地利用がなされたかは不明である。

中世は、室町時代における墓地利用である。県調査区における八幡6号墳後円部周溝での造墓と一連のものとは推察される。造墓階層を判断する材料は乏しいが、八幡の中世における歴史的景観を確認しておきたい。

八幡地域は、加賀国府西側に広がる能美荘の荘域に含まれていたと推定される。能美荘は、加賀国の知行国主・国守が平親宗・親国父子であった頃、野身郷内にあった所領を氏寺尊重寺に寄進したのが始まりである。建久2年（1191）には、後白河院に寄進され、長講堂（後白河院の持仏堂）領となっている。荘域は、旧辰口町北西部から寺井町西部と、南部の八幡・能美町・一針町・長田町にかけて散在している。特に、南部は能美惣荘と呼ばれ、能美町・一針町・八幡一帯は、鎌倉時代中期頃までには石清水八幡宮領に分割されている。

能美荘及び国府所在地周辺の徳橋郷を本拠地とした在地領主に、承保2年（1075）に中宮八院昌隆寺に敷地を寄進した散位橘朝臣の一族、「橘氏」が存在している。鎌倉後期弘安元年（1278）には、石清水八幡宮領能美荘惣公文識に補任された埴田介を称する橘成清の名がみえる。その子息成政は、加賀国八幡宮神主職及び得橋郷長恒名内荒木田・佐々木などの田畠・屋敷を、永仁5年（1297）に幕府より安堵されている。嘉暦元年（1326）関東御教書案にみえる八幡尚成は、橘氏と同族とされ、当地を本拠地とした地頭クラスの在地領主と考えられる。

本中世墓の存続時期と合致する平野部の遺跡に、鎌倉時代に成立した佐々木アサバタケ遺跡が存在する。南北に走る溝に区画された3軒分の屋敷地が発見され、豊富な生活道具が出土している。宅地内は、北側に建物を建てる住居域と、南側に倉庫や工房とみられる窪状遺構や井戸が配置された区域から構成されている。また、井戸の堆積物の分析から、マクワウリ・アブラナ・シソなどの副菜類が住居脇の菜園で栽培されていたことが判明している。延慶2年（1309）南禅寺領加賀国得橋郷内検名寄帳にみえる名主「佐々木宗次郎」を中心とする村の一画の可能性も想定されている。しかし、本遺跡を八幡（橘）氏一族や佐々木氏の墓地とみるには、周辺の配石墓を擁する墓地と比して内容が貧弱であると言わざるを得ない。現時点では、より下位の造墓であると位置付けておきたい。

近世は、再興九谷の八幡若杉窯跡の背面東側にあたる場所であったため、溝1条と若干の窯道具を主体とする遺物が出土したのみである。ただし、その窯道具の実測図を示せたことは、窯業技術を考える上で資するものがあると考えられる。近代寺窯跡は、若干ではあるが実測図が示されており、比較検討が可能で、窯道具の類似性も認められる。今後、発掘調査結果や出土遺物から再興九谷窯跡の実態を解明していく動きもますます必要となろう。

註1 藤田邦雄氏教示。

その他、本稿を記すにあたり、小松市立博物館宮下幸夫より教示を得ている。

第2表 八幡遺跡 弥生土器属性表

番号	出土地点	器種	色調	胎土	構成	口径	器高	底径	脚部径	時期	備考	
1	S01 フク土	甕	2.5Y8/3	密	不良		(3.3)			(21.7)	法仏末～月影1	残存率 4/36
2	S02 No.4	高坏	10YR4/1	密	良	[17.6]	(2.4)				法仏末	内 2.5Y2/1, 残存率 4/36, 陶師付録
3	S02 No.15	甕	10YR8/3	密	良		(4.2)			(17.3)	法仏末	残存率 3/36
4	SD08 No. 1	甕	10YR7/4	密	良		(3.4)	4.2				内 2.5Y4/1, 南加賀産胎土
5	SD08 No.2・4	甕	10YR8/4 ~ 2.5YR5/1	密	良		(3.1)	2.9				内 2.5Y7/2, 南加賀産胎土
6	SB01 (P34)	甕	10YR7/4	密	中々不良		(5.1)			(9.6)		内 10YR6/3, 残存率 9/36
7	P15	甕	10YR7/6	密	良好		(3.2)			(15.5)	法仏未併行	内 7.5YR7/6, 残存率 4/36
8	P18	甕	10YR7/6	密	良好		(3.3)			(13.3)	法仏未併行	残存率 2/36
9	SD01 b 区 下層	甕	2.5Y8/1	密	良		(5.7)			(13.4)	法仏末～月影1	残存率 6/36
10	SD01 b 区 下層	高杯	10YR7/4	密	良		(2.3)				法仏末～月影1	残存率 15/36, 基部径 3.6
11	SD01 b 区 下層	甕	10YR8/4	密	良	[26.3]	(3.7)			(23.2)	法仏末～月影1	内 2.5Y8/4, 残存率 2/36
12	SD01 b 区 下層	踏台	10YR7/6	密	不良	[19.4]	(6.3)					口縁残存率 1/36

(単位 cm)

第3表 八幡遺跡 古墳時代土器属性表

番号	出土地点	器種	色調	胎土	構成	口径	器高	底径	脚部径	時期	備考	
17	SD01 a 区	高杯	2.5Y8/3	密	中々不良		(3.95)			(5.0)	11 期?	内 2.5YR7/4

(単位 cm)

第4表 八幡遺跡 古代土器属性表

番号	出土地点	器種	色調	胎土	構成	口径	器高	底径	見込高	時期	備考	
18	P21 + P2 フク土	長胴甕	10YR6/3	細密	中々不良	21.8	(22.5)				V期～	口縁部残存率 2/36, 全体 18/36, 頸部 径 19.5
19	S02 内 P12	長胴甕	10YR6/4	密	中々不良	[24.5]	(1.5)				Ⅱ～Ⅲ期	口縁部残存率 2/36
20	SD01 上層 No.4	坏B蓋	7.5Y6/1	南加賀	良		(1.4)				Ⅱ 3～Ⅳ 1期	基部径 2.8
21	A～C Gr 表層	甕 A	5Y5/2	南加賀	良	14.4	1.4	11.2	(1.15)		V 1期	口縁部残存率 4/36
22	A～C Gr 表層	小甕	7.5YR7/6	密	良			3.7			Ⅱ 2 新期?	底部回転糸切り

(単位 cm)

第5表 八幡遺跡 中世土器・炆器属性表

番号	出土地点	器種	色調	胎土	構成	口径	器高	底径	見込高	時期	備考	
23	SD01 上層 No.5	土師器皿	2.5YR6/6	密	中々良	10.5	1.7	7.4	1.15		Ⅳ-1 期	内 5YR7/6, 口縁部残存率 10/36
24	SD01 上層 No.1	土師器皿	10YR7/4	細密	良	7.5	1.95	3.7	1.45		Ⅳ-1～2 期	口縁部残存率 8/36, 胎土に赤色粒含む
25	SK09 No.1	甕	7.5YR6/4	中々密	良		(6.9)					産地越前
26	P32	土師器皿	10YR6/3	細密	良	7.4	1.7	6.4	(1.45)		Ⅳ-1 期	口縁部残存率 5.5/36

(単位 cm)

第6表 八幡遺跡 近世出土土器属性表

番号	出土地点	器種	色調	胎土	焼成	口径	器高	底径 (高台径)	見込高	集地色調	備考
27	SD03 フク土	椀瓦	7.5YR4/4	密	良	縦(7.2)	横(9.9)	厚1.86		10YR8/2 灰白	酸化鉄軸
28	SD03 フク土	サヤ	7.5YR5/3	密	やや中良	(29.6)	10.8	(30.0)	(8.4)	10YR6/2	口縁部残存半 3.5/36
29	SD03 フク土	サヤ	10YR6/3	密	良	(27.7)	9.6	(32.8)	(8.4)	10YR6/3	口縁部残存半 5/36
30	SD03 フク土	磚	N7/	密	良	縦(10.32)	横(9.03)	厚(6.3)		7.5YR6/3	
31	F5Gr 包合層	白磁碗	N8/	密	良	(1.6)	3.2			2.5YR/2	残存半 5/36
32	H・DGr 表層	白磁碗	N8/	密	良	(3.1)				N8/0	包縁 7.5YR4/8、残存半 8/36
33	F4・5Gr 包合層	白磁紅皿	N8/	密	良	5.9	1.2	2.1	0.8	5YR8/1	口縁部残存半 15/36
34	E4Gr 包合層	碗	2.5YR6/6	密	良	9.2	(3.1)			10YR8/2	口縁部残存半 6/36
35	A～CGr 表層	碗	10Y5/2	密	良	8.6	4.7			7.5Y6/1	口縁部残存半 6/36
36	F4Gr 包合層	漆鉢	2.5YR5/6	密	良		(3.6)	18.0		7.5YR7/4	残存半 8/36、素焼、漆軸
37	A～CGr 表層	漆鉢	7.5YR5/4	密	良		(4.2)	14.5		10YR5/2	残存半 8/36、素焼、漆軸
38	C～E Gr 表層	漆鉢	5YR3/2	密	良		(10.4)	15.4		2.5Y7/2	残存半 6/36、本焼、漆軸→鉄軸
39	A～CGr 表層	鉢	7.5YR8/4	密	良	(32.8)	(2.6)				残存半 4/36、素焼
40	G5Gr 包合層	漆木鉢	7.5YR8/4	密	良		(3.4)	(14.0)			残存半 5/36、素焼
41	D4Gr 包合層	灯明皿	10YR6/3	密	良		(0.7)	6.0			残存半 4/36
42	A～CGr 表層	甗	7.5YR1.7/1	密	良	(2.9)	11.4			2.5Y7/2	露部部 10YR5/4、残存半 9/36
43	A～CGr 表層	甗	5Y7/2	密	良	(10.8)				2.5Y8/2	露部径 16.2、残存半 6/36
44	C・DGr 表層	椀瓦	7.5R4/2	密	良	縦(8.05)	横(14.9)	厚(1.82)		2.5Y7/2	酸化鉄軸
45	A～CGr 表層	ハヤ	5YR4/4	密	良	6.7	1.6	3.0	0.25		露部、外面 2.5Y7/2の露部あり
46	A～CGr 表層	ハヤ	10YR5/6	密	良	6.9	1.7	3.0	0.25		露部
47	C・DGr 表層	ハヤ	7.5R3/2	密	良	6.5	1.5	3.1			露部
48	A～CGr 表層	ハヤ	10YR6/4	密	良	6.0	1.0	2.6			露部
49	D4Gr 包合層	ハヤ	10R3/2	密	良	7.8	2.1	3.8	0.15		露部上面 5YR4/1
50	カクランB区	ハヤ	7.5YR7/4	密	良	6.6	1.2	上面 3.4	6.5		露部、製品後焼あり
51	G5Gr 包合層	ハヤ	2.5Y8/2	密	良	4.6	0.6	4.4			磁部
52	F4Gr 包合層	ハヤ	N8/	密	良	11.6	1.1	6.0	(0.4)		磁部、残存半 14/36
53	C・DGr 表層	ハヤ	7.5Y8/1	密	良	4.2	0.65	2.4			磁部
54	C・DGr 表層	シノ	10YR7/3	密	良	6.1	2.2	3.4			露部
55	C・DGr 表層	ハリ	7.5YR8/4	密	良		2.3	3.4			露部
56	A～CGr 表層	サヤ	2.5YR4/2	密	良	(32.0)	7.5			7.5YR7/4	露部、内 10YR6/4、口縁部残存半 3/36
57	C・DGr 表層	サヤ	2.5Y5/3	密	やや中良	13.7	6.8			10YR6/3	露部、内 5YR3/4、口縁部残存半 7/36
58	A～CGr 表層	サヤ	7.5YR4/2	密	良		5.3	16.9		10YR5/2	露部、残存半 10/36
59	A～CGr 表層	輪トチ	2.5Y8/3	密	良	3.7	2.3	1.4			露部、残存半 16/36
60	C・DGr 表層	輪トチ	10YR6/3	密	良	4.0	1.9	2.1			露部、残存半 11/36
61	カクランSD	輪トチ	10YR6/3	密	良	5.0	2.7	2.3			露部、残存半 12/36

(単位 cm)

第7表 八幡遺跡 焼成粘土塊属性表

番号	出土地点	胎土	焼成	長	幅	厚	重量	備考
13	S102 内 P4	密	やや不良	3.62	2.62	1.75	11.6g	7.5YR7/4～10YR6/2
14	S102	密	良	11.2	13.4	9.7	1124.2g	7.5YR7/4、罫目?・布目痕あり

(単位 cm)

第8表 八幡遺跡 石器属性表

番号	出土地点	種別	石材	長	幅	厚	重量	備考
15	SD01 b区	石核	緑色凝灰岩	3.8	4.8	3.3	63.28g	玉作り関係
16	カクランSD	砥石	濁灰岩	5.0	4.6	2.2	68.50g	

(単位 cm)

〈遺物観察表凡例〉

- 1 弥生土器の時期は、下濱貴子による。
- 2 古墳時代土器の時期は、石川県立埋蔵文化財センター 1986 年『漆町遺跡 1』による。
- 3 古代土器の時期は、田嶋明人 1988 年「古代編年軸の設定」『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題（報告編）』北陸古代土器研究会による。
- 4 中世土器の時期は、藤田邦夫 1992 年「加賀における様相—土師器—」『中世前期の遺跡と土器、陶磁器、漆器』北陸中世土器研究会による。
- 5 胎土は、緻密・密・やや粗・粗の 4 段階からの相対的評価。
- 6 須恵器の胎土については、産地を記載した。
- 7 焼成は、焼き締まりの良いものを良として、以下やや不良・不良の 3 段階で判定している。
- 8 [] 内の数値は復元値、() 内の数値は現存値である。
- 9 色調は、『新版 標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）による。欄には、外部色調を示してある。内部等が異なっている場合は、その旨備考に記してある。近世陶磁器に関しては、釉薬の発色を記し、素地等は別項に示した。

参考文献

- 北陸中世土器研究会編 1997 年『中・近世の北陸—考古学が語る社会史』桂書房
- 田嶋明人 1988 年「古代編年軸の設定」『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題（報告編）』北陸古代土器研究会
- 望月精司 1999 年「越前・南加賀地域の古代須恵器貯蔵具」『北陸古代土器研究第 8 号』北陸古代土器研究会
- 出越茂和 1997 年「古代後半期における椀皿食器（後）」『北陸古代土器研究第 7 号』北陸古代土器研究会
- 藤田邦夫 1992 年「加賀における様相—土師器—」『中世前期の遺跡と土器、陶磁器、漆器』北陸中世土器研究会
- 石川県立埋蔵文化財センター 1986 年『漆町遺跡 1』
- 石川県立埋蔵文化財センター 1986 年『佐々木ノテウラ遺跡』
- 石川県立埋蔵文化財センター 1988 年『佐々木アサハタケ遺跡 1』
- 社団法人石川県埋蔵文化財保存協会 1998 年『八幡遺跡 1』
- 石川県小松市 2001 年『新修 小松市史 資料編 3 九谷焼と小松瓦』
- 石川県小松市 2002 年『新修 小松市史 資料編 4 国府と荘園』
- 石川県小松市教育委員会 2004 年『八里向山遺跡群』

第三章 吉竹遺跡発掘調査

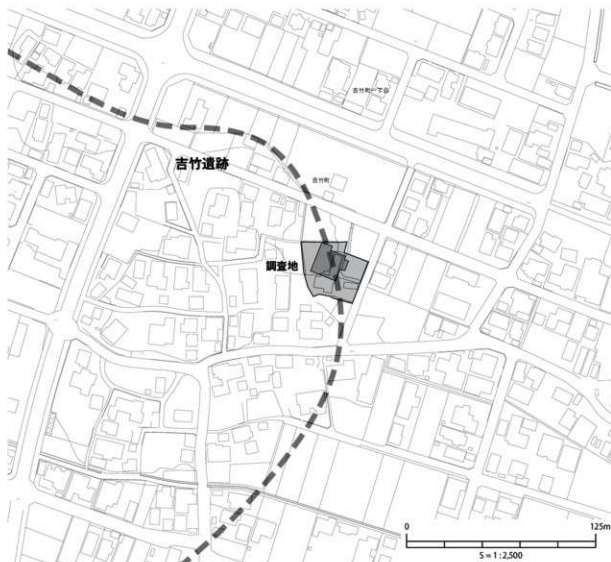
第1節 調査に至る経緯

小松市吉竹町地内で計画された住宅新築工事に伴い、平成22年8月11日付けで桶作正広氏より埋蔵文化財の取り扱いについて協議書が提出された。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地（吉竹遺跡）に含まれていたため、埋蔵文化財センターは同日付けで試掘調査による埋蔵文化財の有無を確認する必要がある旨を回答した。

試掘調査は8月20日に実施し、区域内に8箇所設定した試掘坑のうち5箇所で埋蔵文化財を確認し、8月23日付けで適切な保護措置が必要な旨を通知した。

計画されていた住宅は鉄骨造で地盤を表層改良する設計であり、協議の結果、工法の変更は好ましくないとの結論に達し、表層改良範囲353m²を発掘調査による記録保存を講じるものとして、8月25日付けで文化財保護法第93条に基づく発掘届および発掘調査依頼が提出された。

発掘調査は、個人住宅を原因とするため国庫補助事業として実施するものとし、協議の結果を8月25日付けで協定書を交換して確認し、9月1日に着手した。



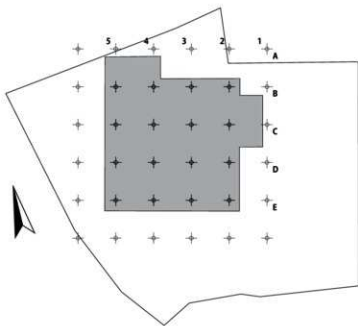
第21図 吉竹遺跡 調査地位置図

第2節 調査の概要

1 調査の方法

調査地は旧来の集落内に所在するため、区画が歪な形をしている。今回は適当な境界標識もなく、着手時点で基準点測量成果もなかったため、調査地に予め張ってあった地縄を基準として5mスパンのグリッドを設定した。座標への投影は、平面図作成時に原点と後視点に対して行った。

平面図及びセクションポイントは、基準点測量及び3級水準測量成果に基づき光波測距儀で得られた座標をすべて野帳に記録し、必要に応じて100分の1、20分の1に図化した。



第22図 吉竹遺跡 グリッド配点図 (S=1:500)

2 調査の経過

9月1日、重機による表土除去、翌々日より作業開始。包含層は土器の細片を斑紋状に含み、人為的な整地層と判断される状況だったため、地山面を確認することを最優先し、グリッドに沿って調査区を囲むようにトレンチを掘る。

9月9日、午後から包含層の掘削開始、ビットばかりがはっきりとしたプランで検出される状況が続く。包含層の出土遺物は土師器と思われる細片ばかりであり、時折出土する底部片から、細片のほとんどは土師器の皿らしいことが窺われた。

この段階で、今回の調査区を示す名称がないと将来的に都合が悪い気がしたが、とくに案もないので、平成7～11年度の区画整理事業に伴う調査区で設定されたシリアル番号(1～25地区)をそのまま踏襲して「26地区」と仮称することにして、ビットに26000を冠した番号を付した。

9月24日、ビットを掘り始める。掘ってみて、プランがはっきりしないものは遺構でないことを確認する。ビットにはプランの大小以外に有意な特徴がなく、遺物の包含状況も包含層とほぼ同じだったが、多少密度に偏りはあるようだった。なお、掘立柱建物の柱穴としたビットに対しては、当初の番号をそのまま用いた。また、ビット以外の遺構番号はすべて2600を冠した。

9月29日、カメラの画角の関係で、南側半分の完掘撮影。翌日より作業の合間に平面図作成のための作業を開始する。

10月1日、北側で検出されていた溝(SD2601=4号溝)を掘り始める。この溝だけ、包含層になかった中世の遺物が出土し、溝は深く底近くで焼礫が多く出土する層準があったため、これより上位を「上層」、下位を「下層」とした。また、焼礫に混じって鍛冶滓も確認された。

10月9日、北側半分の完掘撮影。以降は平面図作成作業のみとなる。

10月15日、すべての作業を完了し、現場を引き渡した。

3 出土品整理

平成24年度に実施した。土器の洗浄及び分類接合から実測及び属性の記録までを作業員が行い、実測図の修正と製図及び属性表の作成は調査担当者が行った。

第3節 周辺の地形と既往の調査

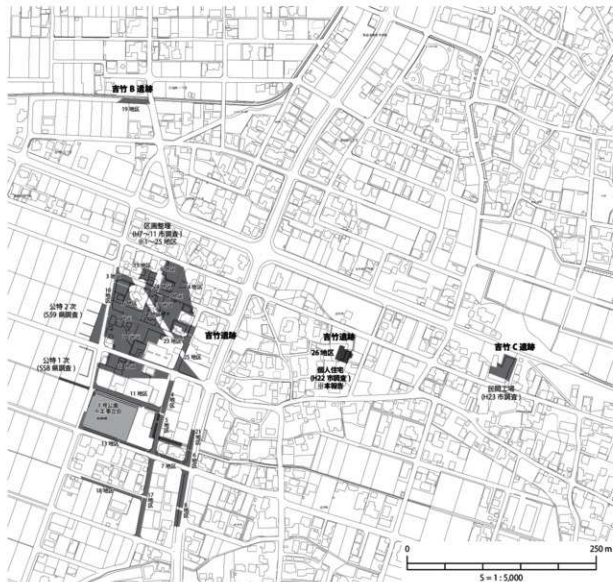
1 周辺の地形

地理的環境については第1章で述べたところだが、吉竹遺跡周辺について今一度確認しよう。

旧来の吉竹集落は、沖積層に囲まれた低平な段丘に立地し、独立丘が南北に2つと東側に丘陵地から北西に舌状に伸びる台地があり、いずれも地質的には高位段丘に分類される。この2つの独立丘と舌状台地の先端部に、都合3つの集落を形成していた。

吉竹遺跡は北側の独立丘全体を占めると推定されている集落遺跡であり、既往の試掘調査及び発掘調査の所見を勘案すれば、独立丘の中央部は大きく削平され、もとの地形よりは全体的になだらかに均されているようだ。西部部の区域は区画整理によって地図上では独立丘の面影は分からなくなっているが、現地では地形の起伏に昔時の面影が残っている。

南側の独立丘では現在までのところ埋蔵文化財包蔵地は確認されていないが、東側の舌状台地先端部で平成19年度の試掘調査で埋蔵文化財包蔵地（吉竹C遺跡）が確認され、平成23年度には発掘調査も実施された。



第23図 吉竹遺跡周辺の調査地位置図

2 公害防除特別土地改良事業に係る発掘調査

石川県立埋蔵文化財センター（現：財団法人石川県埋蔵文化財センター）が昭和58～59年度に実施した。

第1次調査では、排水路部分の調査と周辺のトレンチ調査により、弥生時代後期後半、古墳時代後期、平安時代及び中世の遺物が混在した状態で出土した。

第2次調査は工事中に包含層の一部を削ってしまったために急速実施された調査であり、弥生後期後半～古墳時代前期の土器が帯状に分布する状況が検出された。

また、昭和60年度にも第3次調査として工事立会を実施しているが、この時は現状保存されたことを確認し、発掘調査に至らなかった。

3 吉竹北部土地画整理事業に係る発掘調査

小松市教育委員会が平成7～11年度に実施した。

この時の発掘調査は、街路区域が建設省（現：国土交通省）補助金、台地上の街区区域が区画整理組合負担と文化庁補助金と、事務の取り扱いがきわめて煩雑な状態で実施された。調査区は着手順にシリアル番号（1～25地区）が付され、このうち、事業区域北端の沖積層中に古墳時代前期の塚跡が発見された19地区は、調査後、報告書の中で別の遺跡として取り扱うべきとして「吉竹B遺跡」との名称を付した。

事業区域南側の沖積地では遺物を取り上げたのみで、遺構が検出されなかった点は県調査と同様の結果であった。事業区域中央の台地上では、弥生時代後期後半～古墳時代後期にかけての遺構群が確認された。

参考文献

- イ 石川県立埋蔵文化財センター（1987）吉竹遺跡
- ロ 小松市教育委員会（2001）吉竹遺跡

第4節 層位の見所

右に、8箇所の試掘坑のうち、調査区内に係る2箇所の層位を図示した。試掘坑の位置は平面図（第25図）にも表示している。

調査地は試掘時点ですでに更地だったが、以前に別の建物があり、TP-3はこの建物の跡地にあたる。TP-2は切石で囲って階段状に整地された隣の区画である。前面道路はおおよそTP-3の地山のレベルに対応する。

第2節で述べたように、表土除去の段階で右図の包含層が人為的な整地層と考えたのは、土器細片が斑紋状に多量に含まれている状態が不自然なことに加え、層厚も自然の作用でこれほどの厚さに堆積したとするには傾斜がなだらかすぎるからである。

とはいえ、独立丘の西側に比べると東側の傾斜は相対的に大きく、調査地の西側に、もとは小さな山だったところを突き崩して宅地化したと思われるところもある。調査地周辺で盛土によって整地されているのは、この山との高低差を緩やかにしたものだろう。包含層も、表層の盛土より以前に整地された痕跡と考えたい。それがどの時期であったかは、出土遺物を確認した上で第7節に後述する。



第24図 吉竹遺跡 土層柱状図

第5節 発見された遺構

本報告では、小松市教育委員会の既往の調査で付された遺構番号を踏襲し、本文の記述内容もこれに倣うものとした。既往の調査で報告されたのは、溝状遺構1（石川県立埋文センター1987）及び、竪穴建物9・掘立柱建物29・溝3・土坑19（小松市教委2001）である。

1 竪穴建物（第26図）

10号竪穴建物 [SI2601] 柱穴の位置関係から一辺約5mの方形プランと推定されるが、検出されたのが床面ギリギリのレベルであり、半分以上が削平によって失われている。しかしながら、残存範囲からは水平な面を造成した遺構と考えて大過ないだろう。有意な出土遺物はない。主軸方位は、柱穴を基準にすると座標北より西に約1.7°振れていると考えられる。貼床は、掘削時点で地山ブロックは認められたが、セクションベルトの位置で層として確認することができなかった。セクション図は省略したが、写真図版に写真を載せた。

2 掘立柱建物（第26・27図）

30号掘立柱建物 [SB2601] 桁行2間×梁行1間で柱間は平均で約2.8mであり、主軸方位は桁行平均で座標北より西に約86.4°振れておりほぼ東西を向いている。柱穴に柱の痕跡は確認できず、有意な出土遺物はないが、D-3Gr包含層出土の土師器皿及び碗（第32図30～44・47）がまとまって出土したのは、この建物の近傍である。なお、この建物に関しては、調査区の隅で検出したこともあり確認はできないが、総柱建物の一部の可能性がある。柱穴の埋土は包含層とほぼ同質である。セクション図はない。

31号掘立柱建物 [SB2602] 桁行2間以上×梁行2間で柱間は平均で約2.6mであり、主軸方位は桁行平均で座標北より西に約89.2°振れておりほぼ東西を向いている。柱穴に柱の痕跡は、P26163にそれらしいものが見えたほかは確認できず、有意な出土遺物としてP26163より白磁（第33図68）がある。柱穴の埋土は包含層とほぼ同質である。セクション図は省略したが、写真図版に写真を載せた。

32号掘立柱建物 [SB2603] 桁行2間以上×梁行1間以上で柱間は平均で約2.6mであり、主軸方位は桁行で座標北より西に約87.8°振れておりほぼ東西を向いている。柱穴に柱の痕跡は確認できず、有意な出土遺物もない。柱穴の埋土は包含層とほぼ同質である。セクション図はない。

3 溝（第28図）

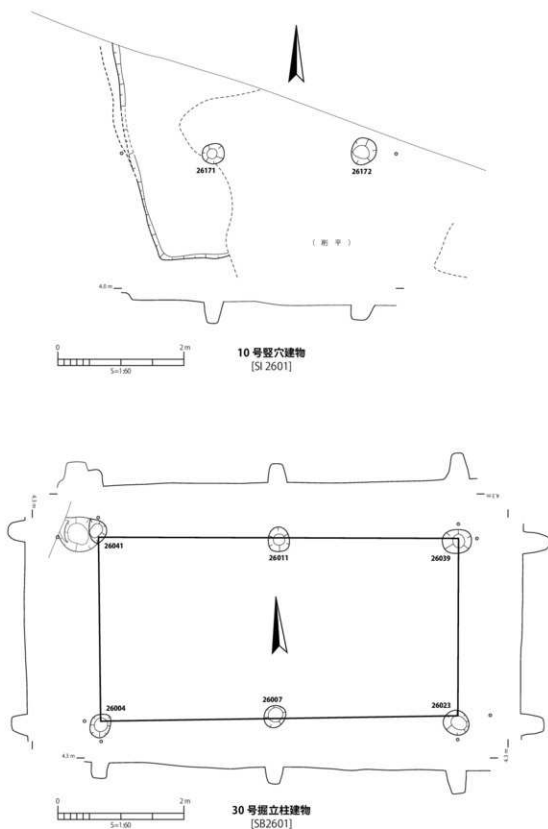
4号溝 [SD2601] 幅が地山検出面で約1.4m、深さが地山検出面から約65cmあり、断面形は逆台形を呈する。下層の覆土は相対的にゆるく、この上で焼礫が多く出土した。出土遺物はこの焼礫を検出するまでを上層、焼礫を取り除いてから下層として取り上げた。上層の覆土は包含層とほぼ同じであり、出土遺物が焼礫の出土する層準に集中することから、人為的に埋め戻されたものだろう。出土遺物は土師器皿を中心に鍛冶関連遺物等（第33図52～67・69～第34図80）がある。

4 土坑（第28図）

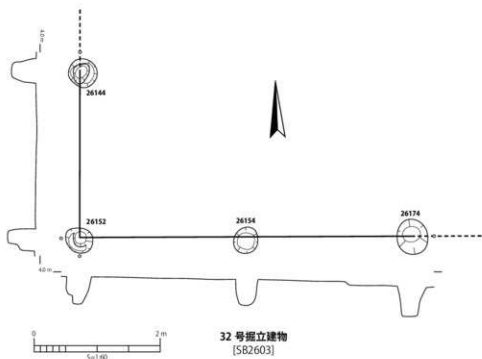
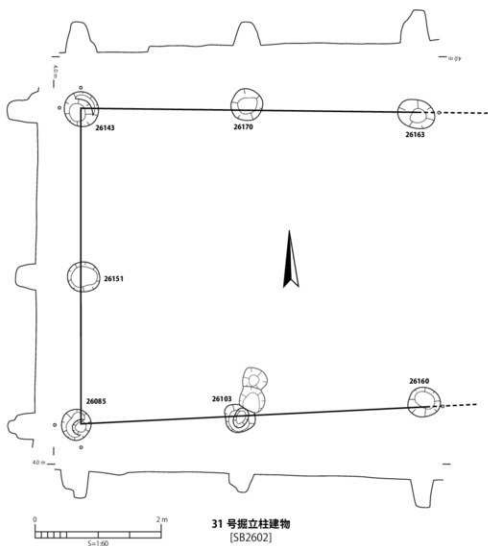
20号土坑 [SK2601] 不整な楕円状のプランで断面形が漏斗状の土坑であり、既往の報告（小松市教委2001）で風倒木痕として遺構から除外されているものに性質は近いかもしれない。有意な出土遺物はない。



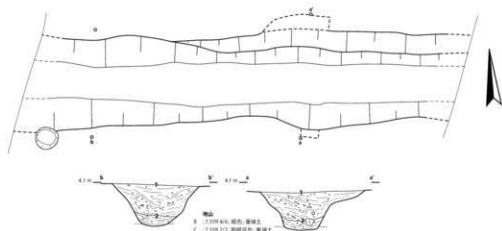
第25図 吉竹遺跡 平面图



第 26 図 吉竹遺跡 遺構実測図 1



第 27 図 吉竹遺跡 遺構実測図 2

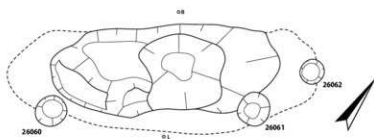


層名: Hue V/C; 土色: 土性; 堅密度; 可塑性; 粘着性; 備考

- 1 : 10YR 3/2-3/3; 黒褐色-暗褐色; 重粘土; 堅; 中; 表面にぼんやり地山面、土器破片含む
 2 : 10YR 3/2; 黒褐色; 重粘土; 軟; 中; 表面に塊礫等含む、土器破片あり



4号溝
[SD2601]



層名: Hue V/C; 土色: 土性; 堅密度; 可塑性; 粘着性; 備考

- 1 : 10YR 2/2-3/3; 黒褐色-暗褐色; 重粘土; 堅; 中; なし; 埋め戻し層か

20号土坑
[SK2601]



第 28 図 吉竹遺跡 遺構実測図 3

第6節 出土遺物

本報告では便宜上、時代区分が変則的となることを予めご了解いただきたい。とくに他意はなく、不適切と思われる箇所は適宜読み替えていただきたい。一応既存の編年に対比しているが、資料の属性や出土位置から読み取ることができる情報は断片的であり、詳述は避けた。

なお、実測図で正中線上に表示したマークは、▼が反転復元、▽が反転復元と調整の描画を示す。

1 弥生時代(法仏期～白江期)の遺物(第29図1～6)

1～3は高環である。出土地点はバラバラで同一個体というわけでもないが、特徴の分かる破片を抽出して掲載するものである。全て包含層からの出土である。環部の形態と脚部の形態から法仏式と考えられる。

4は甕、5は直口壺、6は小型器台である。実測図に起こしても特徴は曖昧だが、白江式の範疇と考えられる。

2 飛鳥時代～平安時代前期の遺物(第29図7～第30図26)

7・8は土師器甕である。口縁部の形態は時期を特定する根拠に乏しい属性であり、5世紀末～7世紀前半の範疇で通有のものとと言えるが、次に述べる須恵器に伴うものと捉え、概ね古代I期としておきたい。

9～11は須恵器環Hの蓋と身である。身の受部が低く全体的に器高が低い特徴から、古代I期の範疇で7世紀前半と考えられる。

12は須恵器甕の口縁部と思われる。古代I期の範疇で7世紀前半か。

13・14は高環脚部である。接続部の器肉が厚く、古代I期の範疇で7世紀前半か。

15は須恵器小型壺であろう。

16・17は須恵器環Bの蓋である。口縁部の形態から古代V期の範疇で9世紀前半と考えられる。

18は須恵器鉢である。口縁部の形態から古代V期の範疇で9世紀前半と考えられる。

19～22は須恵器瓶の口縁部と底部である。主に口縁部の形態から古代V期の範疇で9世紀前半と考えられる。

23～26には、須恵器甕胴部片から拓影が得られるものを抽出した。23は大型品であろう。

3 平安時代後期～鎌倉時代の遺物(第31図27～第33図80)

27～51はロクロ成形の土師器皿及び碗である。包含層中に斑紋状に含まれる夥しい量の土器細片の多くは、胎土や色調を見比べる限りはここに分類されるものと考えられ、出土遺物の大半を占めるものの、取り上げて持ち帰ることができたものはごく一部に過ぎない。属性を読み取ることができない破片からは、27～35のような非常に薄手の皿が主体であり、接合して器形が分かるものは、実測図には反映していないがゆがみが著しい。写真図版にて確認されたい。46～51のような碗については皿のようなゆがみは認められず、丁寧な成形である。49のような内黒タイプは、少量の碗のなかでも稀である。これらは一括性のある資料とは言えないが、概ね中世I-I期の範疇で11世紀後半が主体となるだろう。

52～67は手づくね成形の土師器皿である。既に述べたとおり、全て4号溝からの出土である。器形的には口縁部に外反傾向が見られ、中世III期の範疇で13世紀後半～14世紀前半と考えられる。

68は白磁の皿(あるいは碗)である。31号掘立柱建物の柱穴P26163から出土した。中世陶磁器として確認できるものではこれが今調査で唯一の出土品である。外面と見込みに文様が施されているがどのような構図かまでは分からない。

69 は瓷器系灰陶鉢であり、加賀窯の製品であろう。4号溝からの出土である。

70～72 は須恵器系灰陶甕であり、珠洲窯の製品である。全て4号溝からの出土である。

73～76 は椀形鍛冶滓である。75を除いて鉄を含む。76は鉄塊が見え、溶着した炉壁ごと引き剥がされている。また、75・76は鍛冶炉が箱型であることを窺わせる形状をしている。全て4号溝から、焼窯に混じって出土した。

77～80 は4号溝の焼窯に混じっていた石器である。77・78は砥石、79・80は叩石である。出土状況から椀形鍛冶滓に伴件すると考えられる。なお、巻末の報告書抄録では、「石器」とすると先史時代の遺物と早合点される可能性が考えられるため「石製品」とした。

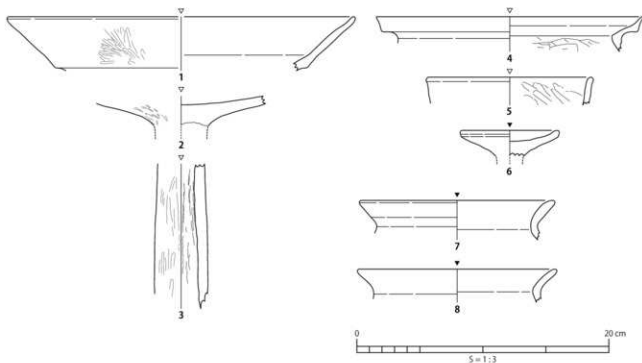
参考文献

- コ 小松市教育委員会 (2001) 吉竹遺跡
小松市教育委員会 (2006) 幸町遺跡 II
- ス 珠洲市立珠洲焼資料館 (1989) 珠洲の名陶、石川県珠洲市
- テ 出越 茂和 (1997) 北陸古代後半における機皿煮器 (後)、北陸古代土器研究 第7号、北陸古代土器研究会 編
- フ 藤田 邦雄 (1997) 中世加賀国の土師器様相、中・近世の北陸、北陸中世土器研究会 編、桂書房
- ミ 宮下 幸夫 (1997) 在地家「加賀窯」、中・近世の北陸、北陸中世土器研究会 編、桂書房

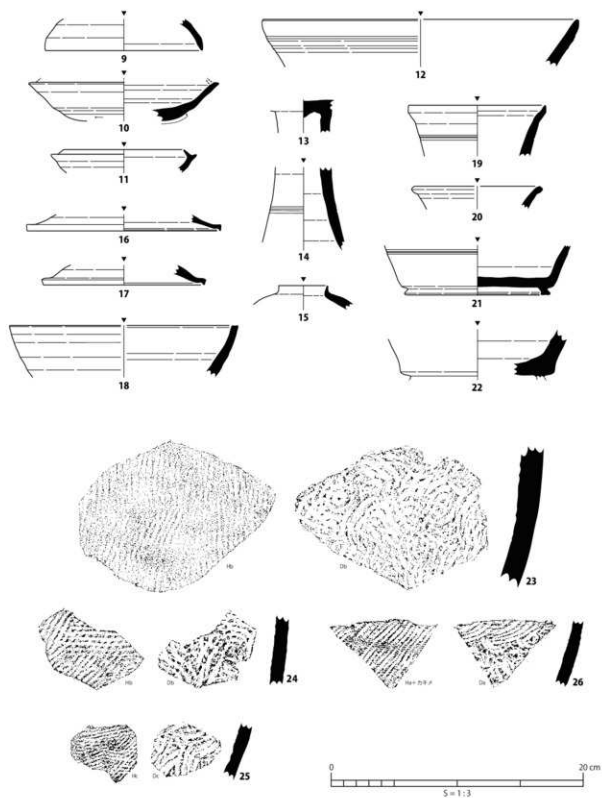
第9表 吉竹遺跡 出土遺物属性表

部	番号	実測	出土位置	分類	細形	寸法/重量	表面色調	胎土色調	備考
20	1	49	B-3G 包含層	赤土土器	高杯(杯部)	口: 28.5cm/0.028	10YR 7/4	10YR 6/1	赤生焼 (法弘)
	2	47	D-2G 包含層	赤土土器	高杯(杯部)		10YR 7/3	10YR 6/1	赤生焼 (法弘)
	3	46	B-4G 包含層	赤土土器	高杯(脚部)		7.5YR 8/3	10YR 6/1	赤生焼 (法弘)
	4	51	B-4G 包含層	赤土土器	椀	口: 21cm/0.111, 胴: 16cm/0.139	10YR 7/3	10YR 6/3	赤生末 (白江)
	5	53	P26145	赤土土器	椀	口: 13cm/0.111	10YR 8/3	2.5Y 4/1	赤生末 (白江)
	6	48	B-4G 包含層	赤土土器	小型碗形	口: 8cm/-	10YR 8/4	5Y 5/1	赤生末 (白江)
	7	52	B-4G 包含層	土師器	椀	口: 15.5cm/0.111, 胴: 13cm/0.167	5YR 7/6	10YR 8/3	7c 前半?
	8	54	P26026	土師器	椀	口: 16cm/0.083, 胴: 13cm/0.028	5YR 6/4	10YR 6/1	7c 前半?
	9	58	B-4G 包含層	須恵器	杯身蓋	口: 12.5cm/0.111	5Y 5/1	N 6/0	7c 前半
	10	57	D-3G 包含層	須恵器	杯身蓋	口: 15cm/0.194, 高: 3.0cm	N 6/0	N 5/0	7c 前半
30	11	60	表土除去	須恵器	杯身蓋	口: 11.5cm/0.111, 高: 9.5cm/-	10Y 4/1	10Y 5/1	7c 前半
	12	62	4号溝下層	須恵器	椀	口: 25cm/0.056	2.5Y 6/1	N 7/0	7c 前半
	13	61	A-4c-4G 包含層	須恵器	高杯(脚部)		5Y 6/1	10YR 6/2	7c 前半?
	14	67	表土除去	須恵器	高杯(脚部)		5Y 5/1	N 7/0	7c 前半?
	15	66	A-4G 包含層	須恵器	小型碗	口: 4cm/0.194	N 6/0	N 6/0	
	16	59	4号溝下層	須恵器	杯身蓋	口: 15cm/0.111	N 5/0	N 5/0	9c 前半
	17	50	表土除去	須恵器	杯身蓋	口: 13cm/0.139	2.5Y 8/2	2.5Y 8/2	9c 前半
	18	64	4号溝上層	須恵器	鉢	口: 18cm/0.056	5Y 5/1	N 6/0	9c 前半
	19	63	D-4G 包含層	須恵器	鉢	口: 11cm/0.139	10YR 7/2	10YR 7/3	9c 前半
	20	65	4号溝上層	須恵器	椀	口: 10cm/0.167	5Y 6/1	5Y 6/1	9c 前半
31	21	55	A-3G 包含層	須恵器	椀	底: 11cm/1.000, 内高: 0.6cm	5Y 5/1	N 7/0	9c 前半
	22	56	A-4G 包含層	須恵器	椀	底: 11cm/0.139	5Y 7/1	N 7/0	9c 前半
	23	73	P26005	須恵器	椀	底: 7.5Y 5/1	2.5Y 7/1		
	24	74	C-4G 包含層	須恵器	椀		N 6/0	N 6/0	
	25	75	P26061	須恵器	椀		N 5/0	2.5Y 7/1	
	26	76	P26157	須恵器	椀		5Y 5/1	2.5Y 8/1	
	27	24	A-5G 包含層	土師器	皿	底: 4cm/1.000	10YR 8/3	10YR 8/3	11c 後半
	28	25	A-5G 包含層	土師器	皿	口: 9cm/0.111, 底: 4cm/1.000, 高: 2.0cm	7.5YR 8/4	10YR 8/3	11c 後半
	29	21	C-4G 包含層	土師器	皿	底: 5.5cm/1.000	10YR 6/3	10YR 8/3	11c 後半
	30	18	D-2G 包含層	土師器	皿	口: 10cm/0.444, 底: 4cm/1.000, 高: 2.4cm	7.5YR 7/4	10YR 7/2	11c 後半
31	20	D-3G 包含層	土師器	皿	口: 10.5cm/0.778, 底: 4.5cm/1.000, 高: 3.1cm	10YR 8/2	10YR 8/2	11c 後半	
32	22	D-3G 包含層	土師器	皿	口: 10cm/0.417, 底: 5cm/1.000, 高: 2.2cm	10YR 8/2	10YR 8/2	11c 後半	
33	23	D-3G 包含層	土師器	皿	口: 11.5cm/0.111, 底: 4cm/1.000, 高: 2.8cm	10YR 8/2	10YR 8/2	11c 後半	
34	26	D-3G 包含層	土師器	皿	口: 9cm/0.056, 底: 4.5cm/1.000, 高: 2.5cm	7.5YR 7/4	7.5YR 7/4	11c 後半	
35	27	D-3G 包含層	土師器	皿	口: 9.5cm/0.167, 底: 4cm/1.000, 高: 1.7cm	10YR 6/3	10YR 6/3	11c 後半	
36	28	D-3G 包含層	土師器	皿	口: 9.5cm/0.139, 底: 5.5cm/1.000, 高: 2.6cm	10YR 8/2	10YR 7/1	11c 後半	
37	32	D-3G 包含層	土師器	皿	口: 10.5cm/0.861, 底: 5cm/1.000, 高: 2.5cm	10YR 8/2	10YR 8/2	11c 後半	
38	33	D-3G 包含層	土師器	皿	口: 10cm/0.944, 底: 4cm/1.000, 高: 2.2cm	10YR 8/2	10YR 8/2	11c 後半	
39	35	D-3G 包含層	土師器	皿	口: 10.5cm/0.778, 底: 5cm/1.000, 高: 2.7cm	10YR 8/2	10YR 8/2	11c 後半	
40	36	D-3G 包含層	土師器	皿	口: 10cm/0.222, 底: 4.5cm/1.000, 高: 2.3cm	7.5YR 7/4	7.5YR 8/4	11c 後半	

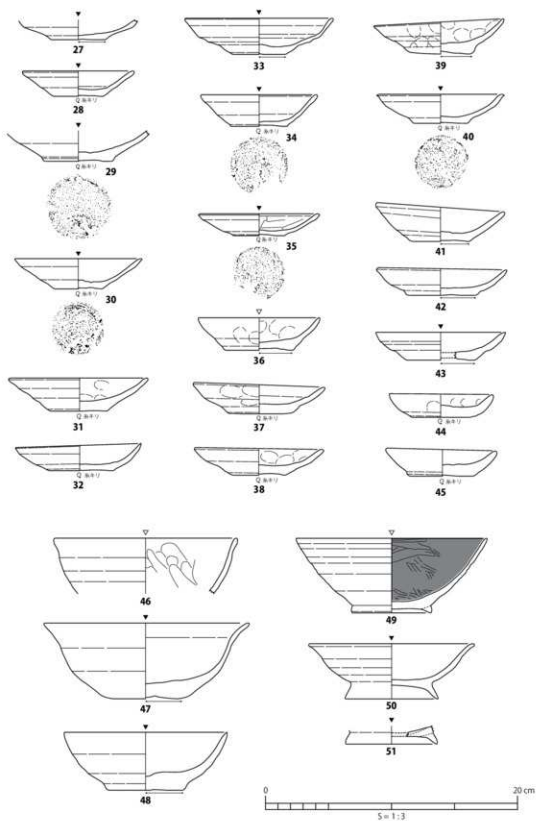
図	番号	実測	出土位置	分類	形状	寸法/残率	表面色調	胎土色調	備考	
31	41	37	D-3G 包含層	土師器	皿	口: 10cm/0.639, 底: 5cm/1.000, 高: 3.0cm	10YR 8/2	10YR 8/2	11c 後半	
	42	38	D-3G 包含層	土師器	皿	口: 10cm/0.750, 底: 5.5cm/1.000, 高: 2.2cm	7.5YR 8/1	7.5YR 8/1	11c 後半	
	43	39	D-3G 包含層	土師器	皿	口: 10cm/0.139, 底: 5.5cm/0.306, 高: 2.2cm	2.5Y 8/2	2.5Y 6/1	11c 後半	
	44	9	D-3G 包含層	土師器	皿	口: 8cm/1.000, 底: 4.5cm/1.000, 高: 1.9cm	7.5YR 7/4	7.5YR 8/4	11c 後半	
	45	13	P26162	土師器	皿	口: 8.5cm/0.639, 底: 5cm/1.000, 高: 2.3cm	10YR 8/3	10YR 8/3	11c 後半	
	46	40	D-5G 包含層	土師器	碗	口: 14.5cm/0.083	10YR 8/3	10YR 8/3	11c 後半	
	47	41	D-3G 包含層	土師器	碗	口: 10cm/0.333, 底: 6.5cm/0.806, 高: 6.1cm	10YR 8/2	10YR 8/2	11c 後半	
	48	43	B-5G 包含層	土師器	碗	口: 13cm/0.361, 底: 6cm/1.000, 高: 4.6cm	5YR 7/6	10YR 8/4	11c 後半	
	49	42	C-3G 包含層	土師器	碗	口: 15cm/0.194, 底: 6cm/1.000, 全高: 5.9cm, 台高: 0.4cm	10YR 8/3	10YR 8/3	11c 後半、内照	
	50	44	D-5G 包含層	土師器	碗	口: 13cm/0.028, 底: 6.5cm/0.528, 全高: 4.4cm, 台高: 1.1cm	10YR 8/3	10YR 4/1	11c 後半	
	51	45	P26051	土師器	碗	底: 6.5cm/0.278, 台高: 0.6cm	7.5YR 8/3	10YR 4/1	11c 後半	
	32	52	34	4号溝トレンチ	土師器	皿	口: 12cm/0.056, 高: 2.2cm	7.5YR 7/6	7.5YR 7/4	13c 後半～14c 前半
		53	6	4号溝トレンチ	土師器	皿	口: 7.5cm/0.917, 高: 2.0cm	10YR 8/3	10YR 8/3	13c 後半～14c 前半
		54	7	4号溝トレンチ	土師器	皿	口: 7.5cm/0.694, 高: 1.9cm	10YR 8/3	10YR 8/2	13c 後半～14c 前半
		55	8	4号溝トレンチ	土師器	皿	口: 7.5cm/0.694, 高: 1.9cm	2.5Y 7/2	10YR 8/2	13c 後半～14c 前半
56		12	4号溝トレンチ	土師器	皿	口: 8cm/0.472, 高: 1.8cm	10YR 8/4	10YR 8/4	13c 後半～14c 前半	
57		11	4号溝下層	土師器	皿	口: 9cm/0.194, 高: 2.1cm	10YR 8/3	10YR 8/3	13c 後半～14c 前半	
58		14	4号溝下層	土師器	皿	口: 7cm/0.361, 高: 1.2cm	10YR 8/4	10YR 8/4	13c 後半～14c 前半	
59		15	4号溝下層	土師器	皿	口: 7cm/0.444, 高: 1.5cm	10YR 8/3	10YR 7/3	13c 後半～14c 前半	
60		10	4号溝上層 + 下層	土師器	皿	口: 7.5cm/0.778, 高: 1.9cm	10YR 7/4	10YR 7/3	13c 後半～14c 前半	
61		31	4号溝上層	土師器	皿	口: 12.5cm/0.139, 高: 2.7	10YR 7/4	10YR 7/4	13c 後半～14c 前半	
62		29	4号溝上層	土師器	皿	口: 11.5cm/0.194, 高: 2.4cm	10YR 7/3	10YR 7/3	13c 後半～14c 前半	
63		19	4号溝上層	土師器	皿	口: 10.5cm/0.389, 高: 2.3cm	2.5Y 8/2	2.5Y 8/2	13c 後半～14c 前半	
64		30	4号溝上層	土師器	皿	口: 10cm/0.167, 高: 2.2cm	7.5YR 8/3	10YR 8/3	13c 後半～14c 前半	
65		5	4号溝上層	土師器	皿	口: 7.5cm/1.000, 高: 1.7cm	2.5YR 7/8	10YR 8/3	13c 後半～14c 前半	
66		16	4号溝上層	土師器	皿	口: 7cm/0.194, 高: 1.3cm	7.5YR 7/2	10YR 8/3	13c 後半～14c 前半	
67	17	4号溝上層	土師器	皿	口: 8cm/0.333, 高: 1.5cm	10YR 7/3	10YR 8/2	13c 後半～14c 前半		
68	70	31号観立 (P26163)	陶磁器	皿		5Y 8/1 (輪)	2.5Y 8/2	白磁		
69	68	4号溝下層	灰皿	鉢	口: 37.5cm/0.111	2.5YR 5/3	2.5YR 5/3	加賀		
70	77	4号溝下層	灰皿	鉢		N 5/0	N 6/0	黒漆		
71	79	4号溝下層	灰皿	鉢		7.5Y 4/1	2.5Y 8/1	黒漆		
72	78	4号溝下層	灰皿	鉢		N 5/0	2.5Y 6/1	黒漆		
33	73	1	4号溝下層	椀形銅冶滓 (含鉄)	粒	長: 8.9cm, 幅: 10.5cm, 厚: 4.7cm, 重: 570.1g	5G7 4/1		メタム度 H、磁器度: 6	
	74	2	4号溝下層	椀形銅冶滓 (含鉄)	粒	長: 7.2cm, 幅: 8.2cm, 厚: 2.7cm, 重: 261.7g	5G7 4/1		メタム度 H、磁器度: 5	
	75	3	4号溝下層	椀形銅冶滓 (含鉄)	粒	長: 8.1cm, 幅: 8.1cm, 厚: 3.8cm, 重: 260.2g	N 4/0		メタム度 -, 磁器度: 0	
	76	4	4号溝下層	椀形銅冶滓 (含鉄)	粒	長: 7.0cm, 幅: 6.8cm, 厚: 5.4cm, 重: 266.6g	5G7 4/1		メタム度 H、磁器度: 3	
	77	83	4号溝下層	硝石	粒	長: 14.9cm, 幅: 12.4cm, 厚: 5.3cm, 重: 1132.3g			砂岩	
	78	84	4号溝下層	硝石	粒	長: 10.3cm, 幅: 7.3cm, 厚: 6.9cm, 重: 445.6g			瀬灰質砂岩	
	79	81	4号溝下層	硝石	粒	長: 8.6cm, 幅: 8.2cm, 厚: 4.8cm, 重: 471.9g			穴山瀬灰質砂岩	
	80	82	4号溝下層	硝石	粒	長: 9.2cm, 幅: 7.5cm, 厚: 5.4cm, 重: 517.0g			変成砂岩	



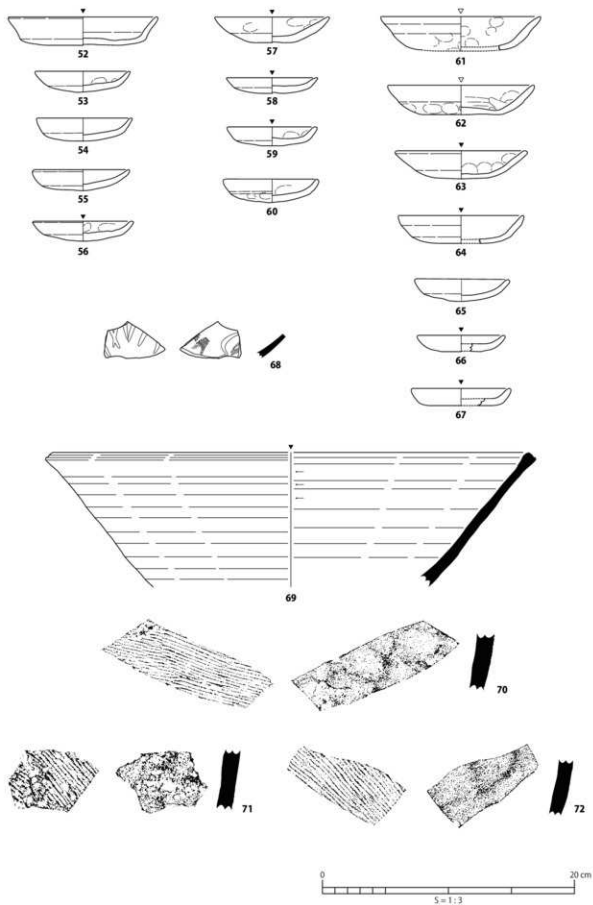
第 29 図 吉竹遺跡 出土遺物実測図 1



第 30 図 吉竹遺跡 出土遺物実測図 2



第 31 図 吉竹遺跡 出土遺物実測図 3



第 32 図 吉竹遺跡 出土遺物実測図 4



第 33 图 吉竹遺跡 出土遺物実測図 5

第7節 まとめ

今調査では古代～中世の遺構が新たに発見された。既往の調査では、遺跡の立地する台地周辺の沖積層から遺物が出土するのみだったので、古代～中世の集落の存在を確認することができたのがいちばんの成果であったと言える。ここでは3項目に分けて、調査担当者の所見として分かったことと分からなかったことを確認しておきたい。

(1) 包含層の形成時期について

第4節で包含層の不自然さについて言及したが、この根拠として、斑紋状に多量に含まれる土器細片を挙げた。第6節でこれら細片は主に11世紀後半の土師器片と考えられるとした。包含層出土遺物はこの時期までのものであり、よって、包含層が形成されたのは少なくとも11世紀後半以降または12世紀代以降と考えられ、このときに土師器細片を多量に含む土で整地したものであろう。この段階で削平を受けたと考えられる遺構は10号竪穴建物である。

次に包含層と4号溝の関係について確認したい。4号溝は、今調査では唯一廃絶時期が明らかな遺構であり、出土した土師器皿から13世紀後半～14世紀前半と考えられる。この時期の遺物は包含層には含まれず、さらに包含層の土で埋め戻された可能性があることから、包含層が形成されたのはおおよそ13世紀前半までの時期と考えられる。

(2) 掘立柱建物の時期について

4号溝との関係で言えば、32号掘立柱建物（以下「掘立」）は近接するかわずかに重複する位置関係にあると推定され、同時期に存在したとは考えられない。また、31号掘立と32号掘立は範囲の半分ほどが重複している上に柱穴の掘方や規模などが似ていると思われ、建て替えの可能性がある。31号掘立の柱穴からは白磁片が出土したが、これは、4号溝と31号掘立の廃絶時期が近いことを示すわずかな手掛かりと言ってよいかもしれない。溝を埋めてわざわざここに柱を立てることは考えにくいという前提に立ち、32号掘立→31号掘立・4号溝という新旧関係を推定しよう。

30号掘立については、近傍に11世紀後半の土師器がまとめて出土したものの、遺構と関連する根拠に乏しいといわざるを得ず、柱穴は包含層と同質の埋土であることから、本報告では包含層形成以降の遺構と考えたい。

(3) 竪穴建物の時期について

10号竪穴建物（以下「竪穴」）については、32号掘立と31号掘立・4号溝のいずれとも重複する位置にあることから、10号竪穴→32号掘立→31号掘立・4号溝という新旧関係を考えて大過ないだろう。有意な出土遺物はないが、穿った見方をすれば、7世紀前半または9世紀前半とした須恵器片がこの周辺に分布していることから、このどちらかの時期の遺構と考えてよいかもしれない。

第10表 吉竹遺跡 遺構の変遷

時 期	遺 構	摘 要
7世紀前半または9世紀前半	(10号竪穴)	推定(古代I期またはV期)
11世紀後半		遺構不明(中世I-I期)
(12世紀～13世紀前半のいずれか)	(30号掘立)、(32号掘立)	包含層形成(整地)、時期不明
13世紀後半～14世紀前半	(30号掘立)、31号掘立、4号溝	時期不明
		廃絶時期(中世III期)

第8節 小 結

最後に、既往の調査分に今調査分の成果をあわせて総括し、結びとしたい。

まず既往の調査分に関して、集落としては弥生時代後期後半（法仏期）に形成され、古墳時代後期（6世紀）を最後に遺構が確認できていなかった。台地上は表土直下に遺構が検出される状況であり、台地を囲む沖積地の包含層に遺物が寄せ集まるように出土した状況が窺われる。台地上では削平によって遺構が検出されない領域も指摘されているので、遺跡が立地する台地西側は全体的に削平によって均された状態だったと考えられる。遺構が確認できなかった7世紀以降については、削平された範囲に存在した可能性を指摘するもの選択肢の一つかもしれないが、確認できない以上は不明といわざるを得ない状況だった。台地西側の領域は全域が区画整理によって造成されてしまったので、これ以上新たな成果が追加されることはまずないだろう。

今調査は台地東側での初めての発掘調査であり、台地上に盛土が厚い領域のあることが新たな知見として追加された。7世紀以降についても、少なくとも遺構が存在することは確認できた（10号竪穴建物）。今調査では逆に6世紀までの遺構は確認されなかったため、台地上では時期によって遺構の分布する範囲が移動した可能性も具体性を帯びてきた。今調査の成果で特筆されるのは、11世紀後半以降、12世紀～13世紀前半の間の時期に大掛かりな整地がされた可能性が指摘できることであり、これより後の時期に位置づけられる遺構は、一般集落と性格を異にするという評価も選択肢の一つに入れてよいのかもしれない。

第11表 吉竹遺跡 略年表

時 期	遺 構	備 考
法仏期	2・7・8号竪穴建物、2・7・9・15・19・22・28号掘立柱建物、6号土坑、1・2号溝	盛期1
月影期	1・6・9号竪穴建物、8・13・18・25号掘立柱建物、17号土坑	
	12・(14)・23号掘立柱建物、16号土坑	
白江期	(14号掘立柱建物)、11・19号土坑	
4世紀	4・13・15号土坑	吉竹B遺跡の翠
5世紀	4・5号竪穴建物、1・10・11・17・20号掘立柱建物、3・5・7・8・9・10・12・14号土坑、3号溝	盛期2
6世紀	1・2号土坑	
	18号土坑	
7世紀	(10号竪穴建物)	
8世紀		
9世紀	(10号竪穴建物)	
10世紀		
11世紀		
12世紀		
13世紀	(30・32号掘立柱建物)	
	(30)・31号掘立柱建物、4号溝	畿内関連遺物
14世紀		
15世紀以降		文献上に「吉武村」

※ コチックは今調査分



調査区域現況



表土除去



遺構確認作業



竪穴建物検出状況



S101



調査中のS102



S102A P8土層断面



S102A・B壁周溝土層断面



S102A·B壁周溝



S102AP33上面



S102AP33下層断面



周堤溝土層断面



S102完掘



SD06土層断面



SD06完掘



SD01土層断面



SD01完掘



SK03土層断面



SK03半掘



SK03完掘①



SK03掘方残し



SK03完掘②



P 2 1 遺物出土状況



SD 0 1 中世面



SX 0 1 掘削前



SX 0 1 土層断面



SX 0 1 完掘



SX 0 2



SK 0 9 土層断面



SK 0 9 遺物出土状況



SD03完掘



SK07土層断面



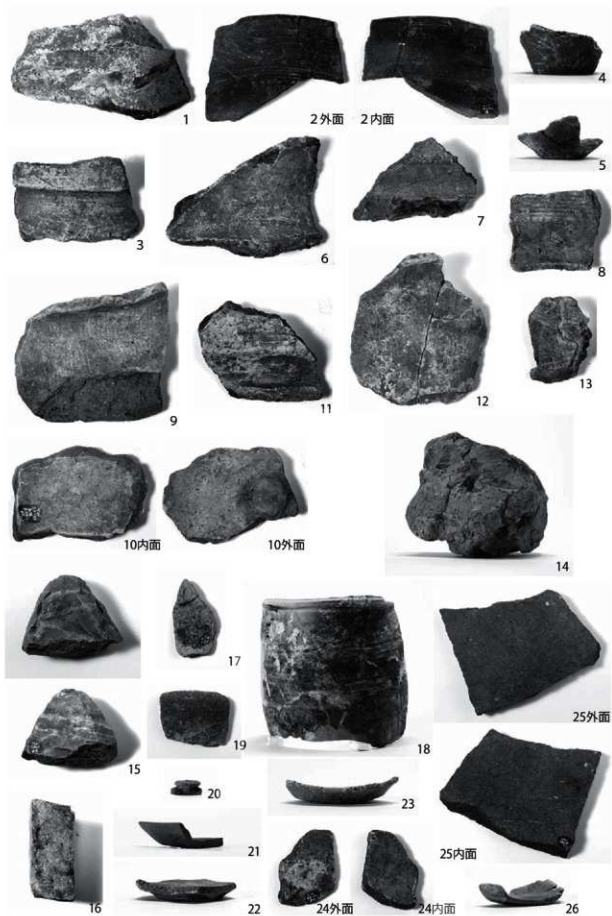
P3土層断面

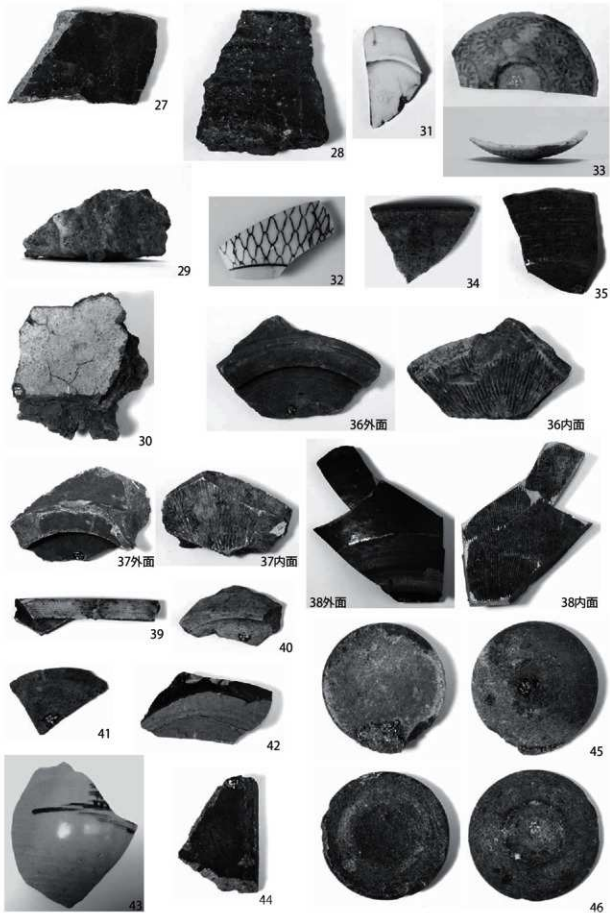


SK07完掘



調査完了(西より)







47



48



49



50



51



52



53



54



55



54



56



57



58



59



60



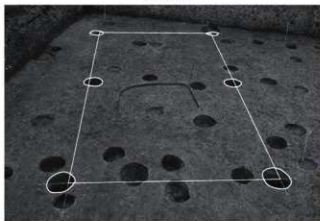
61



作業状況



作業状況



30号掘立柱建物



4号溝



20号土坑 セクション



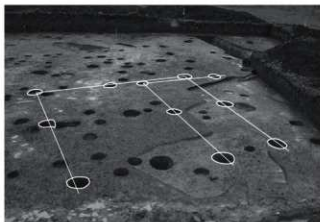
4号溝 a-a' セクション



20号土坑



4号溝 b-b' セクション



31・32号掘立柱建物



10号竪穴建物



P26040 セクション



P26085 セクション (31号掘立柱建物)



P26143 セクション (31号掘立柱建物)



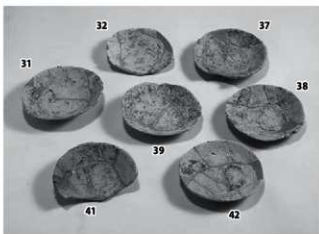
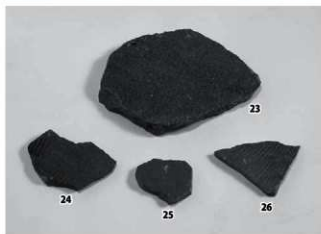
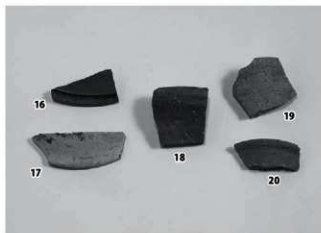
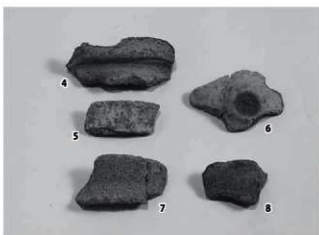
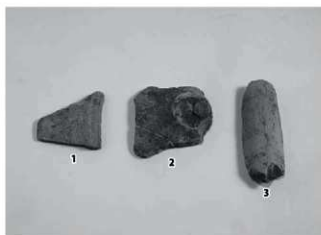
P26163 セクション (31号掘立柱建物)

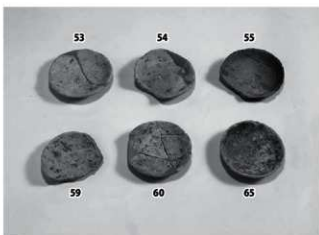
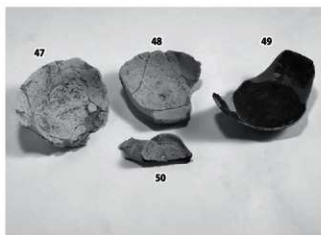


P26165 セクション



P26170 セクション (31号掘立柱建物)





報告書抄録

ふりがな	こまつしないいせきはくつちょうさほうこくしょ9
書名	小松市内遺跡発掘調査報告書Ⅹ
副書名	八幡遺跡・吉竹遺跡
巻次	
編・著者名	川畑 謙二・宮田 明
編集機関	石川県小松市教育委員会
所在地	〒923-8650 石川県小松市小馬出町91番地 TEL (0761) 22-4111(内)
発行年月日	西暦2013年3月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
八幡	石川県小松市 八幡	17203		36° 23' 47"	136° 29' 43"	2008.10.13～ 2008.12.24	467	工場用地造成
吉竹	石川県小松市 吉竹町	17203	03183	36° 23' 35"	136° 28' 42"	2010.9.1～ 2010.10.15	353	個人住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
八幡	集落	弥生 古 中 近 古 代 世 近 世	竪穴建物2、掘立柱 建物1、古墳周溝1、 中世墓2	弥生土器、土師器、須恵器、越前焼、中 世土師器皿、近世陶磁器(八幡若杉窯)、 近世瓦、窯道具、石製品	八幡6号墳が 前方後円墳と 判明。
要約	弥生時代後期後半から終末期の集落を確認。また、八幡6号墳周溝の一部を検出したが、構築時期を特定するには至らず。古代は、ピットの単独検出である。中世は、室町時代の墓地であり、火葬墓を検出。8割程度埋没した古墳周溝の窪地に造られている。県調査区から続く一連の遺構である。近世は、八幡若杉窯の背面に位置しており、排水や区画とみられる溝と、生産に伴う窯道具などが出土している。				
吉竹	集落	弥生 古 中 世	竪穴建物1、掘立柱 建物3、溝1、土坑1	弥生土器、土師器、須恵器、中世陶磁器(白 磁・加賀・珠洲)、鍛冶滓、石製品(砥石・ 叩石)	
要約	竪穴建物は7世紀前半または9世紀前半の遺構、掘立柱建物と溝は13世紀～14世紀前半の遺構と考えられる。土坑については不明である。				

小松市内遺跡発掘調査報告書 IX

八幡遺跡・吉竹遺跡

平成 25 年 3 月 29 日 発行

編集・発行	石川県小松市教育委員会 石川県小松市小馬出町 91	TEL (0761) 24-8132
印刷	株式会社ゲンダ美術印刷 石川県小松市丸の内町 2-32	TEL (0761) 22-7031
